

コミュニティ作りの実践としての日本語プログラム・コーディネート

—大東文化大学別科での11年間(1997-2007)を振り返って—

大河原 尚

【キーワード】実践、別科予備教育課程、交流学生用プログラム、複数の問題認識

1. はじめに

今年度(2007年度)をもって、大東文化大学別科日本語研修課程(以下、別科)は、学生の募集を停止し、一応の区切りを迎えることとなった。ここ数年続けて来た別科の活動報告も今年度分の報告が最後となる。そこで、最後の活動報告をまとめるにあたり、私が別科嘱託講師として別科において11年間にわたって行なってきたプログラム・コーディネートの実践を振り返り、その実践の枠組みの中で、2007年度の活動を報告するとともに、その意味を考えたい。

2. 11年間の別科をめぐる状況

今年度(平成19年度)で幕を閉じることとなった別科だが、発足以来これまで30年余りの歴史があり、大東文化大学における留学生の日本語教育を担ってきた(大蔵、大河原2004)。しかし、平成9年度に嘱託講師制度が採用されてからは、大学の専任教員がその教育に中心に関わることはなく、教育上の意思決定は事実上非専任である嘱託講師(1年契約)が担い続けるという不自然な体制が、その間11年間も続いてきた。

こうした責任の所在が蔑ろにされた体制には、当然ながら多くの問題が内包されていた。特に、大学内における別科の位置づけでは、別科は、各学部へ進学を希望する海外からの留学生に対し、学部での勉学に耐え得るだけの日本語能力を養成することが期待されていた。しかし、これは名目上そうになっているに過ぎず、実際は、日本語能力に問題がありながらも学内の学部推薦制度によって進学する学生がほとんどであった。

別科において、嘱託講師着任当初は、こうした問題の解決に向けて嘱託講師によって様々な提案や改善のための取り組み(例えば、大河原2000、大河原2001、資料3A)が試みられたが、結局別科単独でのこうした取り組みが実質的な成果を上げることはなかった。ここには、学内にける別科ひいては留学生教育そのものに対する大学内全体の無関心が大きな壁となっていたことは否定できない。

こうした状況の中、別科嘱託講師として別科における予備教育の日本語プログラムの他に、海外の教育機関との交換協定によって短期間(通常1年間)在籍する短期交換留学生(以下、交流学生)の日本語プログラムの設計及び運営も行ってきた。後述するように、この交流学生用のプログラムは、本来学部生として在籍することになっている交流学生のうち多くが日本語に問題があって学部での授業が受講できないというところから始まったため、初級の学生を対象とした非正規のプログラムとして運営されていた。

『別科日本語教育』第9号

嘱託講師は事実上、別科の予備教育プログラムと、さらにそれとは目的を異にする交流学生用のプログラムの二つを、実質的な専任教員の関与が得られないまま、中心的存在となって計画し運営することとなった。

3. 別科における「実践」

前項でも述べたような状況の中、別科での実践は実に多岐にわたっている。しかし、その根底には、日本語教育実践ということに対するどのような考え方があったのだろうか。換言すれば、この11年間の別科での実践を通じて、いったい何をやろうとして来たのだろうか。あるいは、私は何を目指して日本語教育に携わって来たのか。ここでは、これまでの別科での予備教育と交流学生用プログラムのそれぞれの実践を振り返りながら、この点について考えていきたい。

3.1. 日本語教育における実践

ここまででも何度か「実践」という言葉を使って来た。具体的な実践を振り返る前に、「実践」をどのように捉えたらいいのか、とりあえずの考察をしておきたい。その上で、11年間の実践の意味を考えることとする。

私自身も日本語教育における実践の意味について、これまでも考察を深めてきた(大河原2002、2003、2006)。実践というのは、そもそも実践を行う対象があって成り立つものである。その対象をどのように認識するか。実践の対象として何らかの働きかけを施す必要があるという認識、つまり対象となる状況の中に何らかの問題状況を見いだす。そこから実践は始まるはずである。しかし、同じ状況に直面しても、その中から何を問題として見出すかは、その実践者によって違い得る。そこには、その実践者の状況を捉えようとする、日本語教育者としての、さらには人間としての根源的な考え方が、問われなければならない(大河原2007)。

3.2. 二つの実践

先の2でも述べたように、別科嘱託講師として、別科における大学予備教育としての日本語プログラムの他に、交流学生に対する日本語教育プログラムも同時に行っていた。そこで、前項までの「実践」の捉え方を踏まえた上で、この11年間の、この二つの目的の異なる日本語プログラムにおいて、それぞれどのように問題状況を把握し、それらの問題に対し、どのような具体策をとって来たのだろうか。それぞれのプログラムにおける各担当者との打ち合わせの資料などをもとに、まずその点を振り返っておきたい。

3.2.1. 別科：大学予備教育課程として

まず、別科での実践を振り返るにあたって、私自身が別科においてどのような問題意識を持っていたかについて整理しておきたい。その上で、各資料の中にその点を見ていくことにする。

3.2.1.1. 別科における問題

別科の予備教育プログラムを担当して以来、1999年（平成11年）と2004年（平成16年）の二度にわたって、別科における問題点を概観している（大河原1999、2004）。前者では、別科の運営、授業の内容、さらには学生対応など、当時別科において問題となっていた点を幅広く網羅的に指摘し、別科の全体像を示そうとしているのに対し、後者は、前者において指摘された問題点に対するその後の取り組みの中間報告的な位置付けから、その時点における、いくつかの重要な課題を選択的に取り上げて指摘し、より詳細に説明している。

この二つの報告においていくつか共通して指摘されている問題のうちで、別科のプログラム運営において重要と考えられる次の3点について、ここでは取り上げたい。

- (1) 日本語プログラムとしての評価及び改善の方策
- (2) 教員の質的向上
- (3) 大学全体における別科の認識／理解

まず、(1)の日本語プログラムとしての評価の問題は、プログラムにける個々の授業というよりも教員体制やプログラムの仕組みとしての部分の改善のためには、調査などによってプログラムの実態を把握し、その結果をもとに評価を行い、さらに改善策を検討し実施に移す。さらに新たな方策の成果を実態として把握する、といった評価・改善のサイクルを形成する必要があることを指摘している。

次に(2)では、日本語教育の成否の大きな部分を、実際に授業を担当する個々の教員にあるという認識のもとに、日常的な各担当教員間の綿密な連絡・意思疎通、並びに各教員の教育能力の向上を別科という組織として支援できる仕組みの必要性を主張している。

最後の(3)において指摘しているのは、日本語教育プログラムの大学内における認識や理解を深めることの重要性である。別科の予備教育にしる、交流学生のプログラムにしる、日本語教育が日本語教育として単独に存在することは不可能である。プログラムが日本語教育として有意味であるために、プログラム外部の学内の関係する諸部署や各人との連携が必須である。

3.2.1.2. 「講師打ち合わせ」資料から見る取り組み

次に、平成10年から平成19年までの、各日本語授業担当者との打ち合わせ資料の中から、別科においてどのような取り組みをしようとしてきたのかを見ていく。分析する資料は毎年度末に翌年度の授業方針や方法について事前に各授業担当教員に説明する「講師会」において使用された資料、及び実際に授業が始まってからその時点で必要に応じて行なった担当クラスの「講師打ち合わせ」の資料である。

平成10年

平成10年度は着任2年目であり、主教材として選定した既成の教科書「新日本語の基礎」の各授業における扱い方から、クラス編製のやり方、一年間を通じた授業の目標とその進め方、各授業間の関連のさせ方、各教員間の打ち合わせの方法まで、別科の日本

『別科日本語教育』第9号

語授業運営において必要だと考えられることを決めて、前年度末の講師会において説明している（資料1A、1B、1C）。ここでは、教員体制を含めたプログラムにおける授業の枠組みを確立することに主眼があり、その評価や学内に対する理解の促進という視点は見られない。

4月の授業開始以降は、定期的に各教員との打ち合わせのミーティングを開催している。（4月は毎週、5月以降は原則として毎月1回、一年間を通じて合計12回開催している。）このミーティングにおいても、主な話題である、当初の計画に沿って各授業が進んでいるかを自身も授業を担当し学生の状況を確認しながら、進めている。

平成13年

平成10年度に実施した授業の枠組みにおいて、特に大きな問題や重大な指摘は他の教員からもなく、その枠組みが別科に定着し始めていた。それに加え、平成13年度からは、それまで2名だった嘱託講師が3名に増員された。前年度までは、2名の嘱託講師が三つのクラスを共同で担当していたが、嘱託講師が3名になったことで、各嘱託講師がそれぞれ一つずつクラスの担任として、受け持つこととなった。そのことで、より詳細なクラス授業の運営は各担当の嘱託講師に任されることとなった。

特に、前半の主教材「みんなの日本語」終了後の授業を始めるに当たって私が作成した授業全体の計画を各授業担当の先生方に説明するために作成した資料（資料1D）には、それぞれの授業の目標だけではなく使用教材、さらにはその授業での使い方や授業での手順を丁寧に書いている。これは、担当の各先生方に対して、定められた方法にそって忠実にそれを授業で再現してほしいといった自身の意識の現れであるとも考えられる。

また、授業が行われている期間に開催した担当教員との打ち合わせ（年間で合計6回の開催）では、クラス全体の進捗や学習状況の他に、個々の学生の授業での反応やその解釈等かなり詳しく書いている。これは、個々の学生によりきめ細かく対応しようとしている一方で、先生方に対して、単なる教材の使い方や活動の手順だけでなく、授業における学生のどのような反応に着目し、それをどのように解釈し、どのように対応すればいいのかといったことまでを、示そうとしていたと見ることができる。

平成15年

前年度末の講師会で使用した資料は、内容がそれまでのものとほとんど変わらず、授業開始後の教員間打ち合わせも、前期末の全体の打ち合わせ会の時に行なったものを含めても、前期にわずか3回しか行なわれていない。これは、それまで授業のやり方や学生への対応にし方を詳しく解説しようとして来たことから考えると、大きな変化である。

打ち合わせの内容を見てみると、授業のやり方や教材の説明もあるが、むしろ原則としての授業の方針といった抽象的な内容を何度も繰り返している点が目立つ。

また、第2回の打ち合わせ（資料1E）において、当初主教材「みんなの日本語」に入る前に日本語の音声や文字に慣れる準備期間を十分にとろうと計画していたのが、先生

方からの意見で、それを早めている。自身としては、準備期間内にしておきたかったことを、「みんなの日本語」に入ってから続けるように要請している点から考えると、先生方の意向を受け入れる形で不本意ながら準備期間を終了させていると考えられる。これは、それまで先生方にさまざまな説明を行なって来た私自身にとっては、一つの大きな方向転換だったことがわかる。

平成16年

嘱託講師3名がそれぞれに一つずつクラス担任として、クラスを担当し、各担当クラスの教材、授業の進め方、担当教員との打ち合わせ等のコースのクラス授業の運営に関することを担う体制が定着して来た。しかし、年度開始に当たっての講師会（教員全体の打ち合わせ会）において、配布資料（資料1F）に「別科での日本語教育に関する基本的な方針」という項目が追加され、別科の3クラス共通の方針として3つの点を示している。このことは、各嘱託講師が十分に意思統一できずに各クラスの運営に当たる現状で、別科全体としての日本語教育における方針を明確化する必要があると感じていたからではないだろうか。

授業時開始前の打ち合わせ（資料1G）では、やはり、詳細な教え方の指示といったようなものはなく、原則的な方針が繰り返されている。また、授業の内容を説明した箇所においては、「作業の手順は特に決めませんので、その時々状況や授業内容によって教えやすいよう」にするように、具体的な進度も「各担当者と相談して」すすめることを明記している。さらに、授業開始後の各先生方との打ち合わせミーティングも時間的な関係で個別に打ち合わせることになり、打ち合わせ用の資料も使用教材が変わる後期の2回だけとなった。

明らかに、着任当初から見ると、各先生方に対するアプローチが変化して来ている。以前のように、詳しく授業のやり方や学生との対応の仕方について示したり指示したりしなくなっている。それと平行して打ち合わせミーティング回数も激減し、先生方に配布する資料にも、長々と文章で説明する代わりに、各項目に簡潔なタイトルを付け分かりやすくする工夫も見られる。ここにも教員に対する対応の仕方の方向転換を見ることができる。

平成17年

前年度末に行なわれる講師会において、教員全体に向けての資料にはほとんど内容に変化はない。ただ、自身の担当するクラスの各先生方に対する配布資料（資料1H）には、冒頭に次のようなメッセージがある。

I. 新学期の開始に当たって

今年もまた、新しい学生が来ます。別科としての目標は変わらなくても、学生の抱えている問題や状況は常に新しいものです。その意味で、我々教師も、自身のそれまでの経験は経験として、常に新しい気持ちで学生に臨みたいものです。

コミュニケーションは、時々キャッチボールにたとえられることがあります。

『別科日本語教育』第9号

ます。そこで、学生は日本語というボールの投げ方や受け方を学習するのです。学生は自分が欲しいと思っているボールを正しく返してもらうために、どのように投げたらいいのか。その返って来たボールと欲しかったボールの違いによって学生は学んでいくものだと思います。我々教師は、ときには忠実な「壁」となってボールを返すことも必要だと思います。また、学生が自らボールを投げようとする仕掛けを用意することも我々教師の役割かもしれません。（「第1回講師打ち合わせ（Ⅲクラス）」より）

このメッセージは、前期末の全体の打ち合わせ会の際の配布資料にも再度記している。

また、新しい試みとして、教師間で授業の進捗を連絡し合う「連絡帳」の書式を変更した。従来の連絡帳では、進捗としてどの教材の何課の何頁まで行なったかを記入するだけであった。新しい連絡帳では、従来の情報に加えて、授業を行っての学生の様子や反応、それに対する先生自身の解釈や理由付け、さらには望ましい対処策まで、できる範囲で記入してもらうこととした。この試みの成果はあまりはっきりしていないが、少なくとも、私自身の中で先生方に対するアプローチの変化を示す現れである。

配布資料から見ると、この年度では、私自身の考える基本方針を繰り返し、且つできるだけ具体的に分かりやすく示し、先生方と対等に向かい合うことを目指していた。それと同時に、各先生方に対しても、コーディネータの指示や説明を受け身的に聞いて授業を行なうのではなく、一人一人先生方の授業における自主性や積極性をできるだけ引き出そうとしていることがわかる。

平成18年

担当する授業に関わる先生方に対するアプローチは、平成17年度の場合と基本的な変化は見られない。授業開始前の講師会でのメッセージも新しい連絡帳の試みも引き続いて行なわれている。

平成18年度での大きな変化は、よりコーディネータとしての自身の内的な営みをできる限り開示しようとしている点に見られる。前期末の全体の打ち合わせ会での配布資料（資料II）では、担当するクラスの授業を行なう先生方だけでなく、他のクラスを担当する先生方、さらには別科長（経営学部教授で日本語教育に対する専門知識が必ずしも十分なわけではない）に対しても、クラスコーディネータを行なうにあたってどのような事をどのように考えて対応策を講じて来たのか、またこれまでの担当クラスの状況をどのように分析し認識しているかといった点についても、できるだけ詳しく明記している。

これは、私自身の意識が、これまで単に担当の先生方にだけ向いていたのが、その外側のより広い範囲にまで向かい始めていることの現れだと考えることができる。コーディネータとして日々直接接する先生方だけでなく、その他の外部の関係者にも開示し理解を求め認識を深めてもらいたいという、意識の変化だと見える。

平成19年

平成19年度は、学生数の減少もあってこれまでの体制が大きく変化した。その詳細は

後述するが、体制の変化により嘱託講師3名だけでほとんどの授業を行うこととなり、従来のように担当する非常勤講師の先生方を対象にして何らかの働きかけを行なうことはなくなった。

そうした状況の中で、別科の授業計画に当たって、改めて授業の行ない方に注目するようになっている。つまり、一つのクラスにおいて、そこでの背景や日本語力が異なる各学生間のダイナミズムをどう管理して、クラスを運営し、授業を行っていったらいいかという点である。そこで、注目しているのが学生間の相互作用による学習の促進である。これまでは、どうしても教師が一人一人の学生を教えるという枠組みで授業を捉えがちであった。しかし、授業における学生間の相互作用をできるだけ促して、一つの活動でも学生同士が協調的に活動を遂行することで、それぞれのレベルやニーズに合わせた学習をそれぞれの学生自身の手によって(教師から一方的に与えられるというだけでなく)実現できるような授業内容が考えられている(資料1J、1K)。

3.2.1.3. 三つの問題点について

ここで先に挙げた三つの問題点について、ここで見た別科の実践から考えてみる。

まず、第一の日本語プログラムの評価と改善については、この間毎年のように新たな試みに挑戦しているが、その成果を評価するための別科全体としての活動は見られない。その意味では先に述べた評価・改善のサイクルは全く行なわれていなかったと言わざるを得ない。これは、一年契約の嘱託講師としての立場上の限界という面もあるが、別科の他の教員との十分な協働体制が築けなかったことも要因の一つであろう。

次は、第二の教員の質的向上については、この間さまざまな取り組みを行なって来た。それと同時に、私自身の他の教員に対するアプローチの変化も見られた。授業のやり方をマニュアル的に与えようとしていたところから、各教員のそれぞれの能力や自主性を活かし、自分自身もそうした教員と同じレベルに立って協力体制を築こうとするようになった。これは、私自身のプログラムのあり方に対する考え方の変化が背景にはあると考えられる。つまり、大河原(2006)でも議論しているように、プログラムにおける日本語教育に効率性を求めるがあまり、各先生方に対して、プログラム全体の中でコーディネータによって決められた役割を確実に果たしてもらいたいと考えていたのが、各先生方の能力や専門知識、それぞれの経験を生かすことを優先に考えてコーディネートを行なうようになった。このことで、「教員の質」として各教員に求めるものも変化した。

第三の学内での理解については、しばらくの間あまり意識されずに来たが、平成18年度での打ち合わせにおいて、コーディネートの内的過程までを示して、広く別科の教育の実際について理解を求めようと、資料を作成している。これは、別科の教員内の打ち合わせ会という内部的な会合の場でありながらも、正式な別科の会議ということで、そこにおいても学内に対する説明責任を果たそうとする意識の現れであった。

3.2.2. 交流学生のための特別日本語プログラム

交流学生の日本語プログラムは、制度的に大学での正規の授業としての位置づけでは

『別科日本語教育』第9号

ないため、その面においても大きな問題を含んでいる。そのため、このプログラムを運営するにあたり、特に別科の体制がある程度軌道に乗ったと考えられた平成11年度から平成15年度の間は、頻繁に、その担当部署である本学国際交流センターと打ち合わせをもっている。これらの打ち合わせにおいて何度かにわたってこちらから、国際交流センターに対し交流学生のプログラムに関する問題点等を整理し、対処策の提案を含めた資料を提出している。

ここでは、それらの打ち合わせに提出した資料から、主な5点を分析することで、現状に対する問題をどのように捉えていたのか、そしてそれらの問題をどのように対応しようとしていたのかを見ていくことにする。

3.2.2.1. 国際交流センターとの打ち合わせ資料から見た問題意識

ここで分析の対象とする資料は巻末に付した資料2Aから資料2Eまでの5点である。

資料2A「短期交換留学生に対する日本語教育についての問題点と今後の方向性」(平成11年度)

ここでは、まず根本的な問題として交流学生の本学での教育方針の欠如を指摘している。しかし、既に授業が行われている現実を見て、現実的な問題解決を目指しているようである。つまり、交流学生に対する日本語授業の現状を3つのパターンに分けて整理し、留学生活における授業の大半をこの日本語コースに費やさざるを得ないケースが最も多ことを指摘して問題提起している。

直接管轄する部署が異なるということで、具体策の提案はできるだけ避けて、問題提起にとどめていると考えられる。

資料2B「短期交換留学生に対する日本語トレーニングコースに関する問題点と今後について」(平成11年度)

ここでは、先の資料から一つ踏み込んで、それまで教育方針の欠如とだけ指摘していた根本的問題を分析し、次の2点の問題を指摘している。第一は、日本語コースの位置付け、つまり学部授業との関係において、どのような場合にはどちら(学部授業か日本語授業か)を優先するか言った点で、日本語コースの目的を明確化し、日本語授業を開講しても学部授業が常に優先されてコースとしての存在そのものが問われる事態があること。第二は、日本語コースの目的は不明確なまま授業が行われている点をまず指摘した上で、日本語プログラムの目的を日本語能力の向上ではなく、日本での異文化体験とすることが現実的であることを主張している。さらに、そうした目的のもとで授業が行われることを前提とし、こうしたプログラムが交流学生だけに提供されるべきものではなく、広く学内全体の留学生にもその対象とすることを視野に入れたプログラム設計があってもいいのではないかという点を指摘している。

それを踏まえて3つの提案を行っている。さらにその提案をもとに具体的な方策を交

流活動と日本語授業とに分けて例示している。

資料 2C

「第 2 回短期交換留学生に関する打ち合わせ」(平成 13 年)

ここでの打ち合わせでは、実際の日本語授業の計画についての打ち合わせと同時に、いくつかの授業以外の具体的活動の提案がなされている。

一つは、日本人学生ボランティアを募って、日本語の授業において活用すること。また、短期交換留学生用のホームページをインターネット上に作成して、大学の教員やスタッフ、日本人学生、短期交換留学を終えて帰国した留学生、現在の交流学生、さらには将来本学に短期交換留学を希望する留学生などを結んだ交流の場として活用することである。最後に、交流学生の帰国時に行っている生活アンケートの活用や公開の可能性も提案している。

資料 2D

「短期交換留学生の教育について」(平成 13 年度)

資料 2A では、日本語授業の役割として日本語授業と実際に来日する学生とのマッチングのパターンを 3 つに分けて現状分析を行った。しかし、ここでは既存の日本語授業を前提とせず、実際の交流学生の日本語能力を 6 つのレベルに分類している。その上で、現状の日本語コースがどのレベルをカバーしているかという点から具体的な運営上の問題点、それに加えて交流学生の側からの問題点もあわせて指摘し、問題の全体像を描こうと試みている。

そして、ここでは根本問題ではなく「教育方針について」といった項を立てて、その必要性を強調している。さらに、本来は大学の大きな教育方針やビジョンといったものの中から出てくるべき性質のものであり、日本語コース単独では決められないはずのコースの目的を、現状に即した形で独自に探ろうと試みている。

そこで、最後に「短期交換留学生プログラムとして(提案)」とした、簡単なプログラム案(「基本的な教育方針(目標として)」「基本的な構成要素」「プログラム運営の体制として」とから成る)を示している。この提案では、交流学生の日本語プログラムが単なる日本語能力養成のための授業を行うといったものではなく、プログラム運営の体制にまで言及し、全学的な取り組みとして、交流学生に広く学内外との接触を積極的に促し、各自のもっている「日本」観の変更あるいは更新を迫る内容のものであることを示そうとしている。

資料 2E

「短期交換留学生の教育における基本的な方針と方策について」(平成 15 年度)

この時点では、私が交流学生の日本語プログラムのコーディネートを担当して既に 6 年が経過していた。その間、根本的な問題は全く解決されず、何のために、何を目標としてコーディネートを行えばよいのかの手がかりはどこにも見出すことができずに来ていた。そこで、ここでは、それまでのように問題点の指摘や具体策を提案するのではな

『別科日本語教育』第9号

く、これまでの経験を踏まえ、現場での立場から実現可能性のある目標を、基本方針として設定し、それに基づいたプログラムの具体的方策を決定することとした。

ここでは、次の二つを交流学生に対する教育の目的としている。

(1) 日本語で日本人とコミュニケーションできるようになるための日本語の学習。

(2) 日本の文化や社会、歴史の他に日本人のものの考え方や人間関係のあり方等、日本について知る。

そして、この目的達成のために、授業において知識を教えるだけでなく、「実際の体験を通じて授業等で得た知識を確認したり、新たに発見したりできる環境を準備すること」をプログラムの主要な内容とし、この授業と体験の循環を作り出すことを目指している。さらには、こうした循環によって、交流学生の日本観の形成や更新をも促そうという方針である。

具体的な方策の計画案においても、学内の現状を踏まえた現実可能性を考慮して、新たに企画や活動を設けることはせず、既存の活動や学内外の諸条件（例えば、学長との面談やホームステイの必須化、地域との交流など）、教育スタッフ等の現状を上目的にそって再編し、授業だけでなくその他の活動も統合した全体としてのプログラムを提案している。

3.2.2.2. 根本問題に対する一貫した立場

ここで、これまで見て来た5つの資料についてまとめてみると、交流学生のプログラムのコーディネートを担当した当初から、別科での予備教育といった分かりやすい外的な目標がない中で、交流学生の大学としての教育方針の欠如が根本的な問題として繰り返し指摘して来ている。それと同時に、さまざまな具体的な方策も提案している。提案されている具体策の内容を見てみると、そこには一貫した立場が見て取れる。それは、日本語学習を授業の中だけに限定せず、授業外での「日本」という異文化との接触を奨励し、そのための機会をプログラムとして組織的に準備する必要があるということである。

その一方で、一向に進展の見えない大学側の対応に対して、それまでは一つの例として断片的に示していた具体策の提案も、資料2Dでは、その運営体制にまで及ぶようになり、資料2Eでは、独自の方針を明確に打ち出し、具体的なプログラム内容の全体像まで示している。

3.3. プログラム・コーディネータとしての実践の意味

ここまで、別科及び交流学生の日本語プログラムのコーディネートの実践について見て来た。では、こうしたプログラム・コーディネートの実践を通して、私自身はいったい何を目指して来たのであろうか。これまでの振り返りの中でも明らかなように、ただ単に、学内的状況の中で与えられた課題に対して受け身的に対応して来たわけではなかった。

ここで、先の3.1で述べた「実践」に対する考え方を確認しておきたい。実践では、まず実践として働きかける状況の中のどこにどのような問題を見出すかが重要であっ

た。さらに、その問題を解決するために行なった実践には、その実践状況をどういった方向にもっていきたいかという実践の理念が、その基礎にあるはずである。この2点をここでは考察していきたい。

3.3.1. 問題認識

対応すべき問題状況をどこに、どのような問題として見出すかによって具体的な実践の活動内容は異なってくる。ここまで見てきたように、コーディネータとして行う具体的な一つの実践ではあっても、そこには複数の問題認識が反映されていることがある。そこで、これまで振り返ってきた実践を、次の四つのレベルの問題認識に整理して、それに対して実際にとった具体的な活動と合わせて見ていくこととしたい。

- ①一つの授業においてクラスを運営する一人の教師として、
- ②一人一人の学生に対するプログラム・コーディネータとして、
- ③プログラムの各日本語授業を担当する教員に対するコーディネータとして、
- ④学内に対するプログラムへの理解を求める立場として。

3.3.1.1. 授業を運営する教師として

ここまで分析の対象としてきた資料はプログラム・コーディネータとして各日本語授業担当の教員及び学内の担当部署に対して作成されたものであった。よって、これらの資料からクラスでの授業運営に対して、一人の教員としてどのような問題意識を持っていたかは、直接はわからないが、各教員にどのようにクラス授業の運営に関わってほしいかといった点から、私自身の一教師としての問題意識を推察することができる。

まず、日本語教師としての最大の関心事は、どうしたら担当する学生が日本語の語彙・文法を覚え、それを適切に運用することができるようになるかということである。そのために日本語の運用というものについてどう捉え、その向上にはどのような活動が必要かといった点がどのように考えられていたのか。

最初の日本語運用に対する考え方について、別科での講師打ち合わせの資料では、当初から一貫して、いわゆる「読む、書く、聞く、話す」の四技能ではなく、「表現」の活動と「理解」の活動とにまとめて区別して扱っている。またもう一点、毎年繰り返すべられているのは、より大きな文脈を意識して、できるだけ全体としての意味の中で表現や理解の活動を行うということである。このことは、大河原(1999)にも指摘されているように、授業での焦点が文法にあると、学生もそのことだけに注意を集中するようになり、本来の目的である日本語を現実の文脈の中で運用することになかなか到達しないという問題がある。

また、二番目の能力向上のためにどのような活動を授業で行ったらいいかという点に関して、大河原(1999)で指摘されているのは、日本語レベルや学習スタイルなどさまざまな点において多様な学生がクラスの中には存在するという問題意識である。そのための方策として、特に平成19年度では、同じクラス内の別の学生の学習過程やスタイル、ストラテジーなどに相互に垣間見ることによって、また時には議論といった直接的な活動によって、協調的な学習環境を授業の中で築いていくことを強調している(資料

1K)。

3.3.1.2. 学生に対してのプログラム・コーディネータとして

実際のプログラム運営において、直接学生に接して授業を行うのは一人一人の教員であるが、その授業の枠組みとしてのカリキュラムを決めるのはコーディネータの責任である。各先生方の授業を通して一人一人の学生に対しどのようなメッセージを伝えたかったのか。

別科のカリキュラムを見てみると、大きく午前と午後に分けて、午前は初級では教科書にそった文法や文型を定着させていくこと、中級以降では特に読むことを中心とした総合的な活動の時間とした。それに対し午後は、午前における別科での目標にそった中心的な活動を補足し、それらを単なる知識のレベルで終わらせずに、運用にまで持っていけるようにするための時間として工夫している。ここにも、対面式の授業では、どうしても教員から学生に知識を与え、学生はそれを覚え身につけるという授業の図式になりやすい、という問題意識があるように見える。日本語学習が単に知識の習得に終わるのではなく、教室の外に出てそれらを運用できるようになってこそ、授業での日本語学習は意味を持つてくるとの考え方がうかがえる。

この点について、交流学生に対して交流学生用の日本語プログラムについての説明のために作成した文書でも、日本での圧倒的な日本語の環境にも臆せず、それにチャレンジすることの重要性を説いている（資料2F）。

3.3.1.3. 教員に対してのプログラム・コーディネータとして

プログラム・コーディネータとして、多様な教員がいることは必ずしも、コーディネータがやりやすい状況とは限らない。というのは、コース全体としての一貫性の問題と相反する場合があるからである（大河原2006）。この点から、別科のコーディネータを担当した当初は、できる限りそうした教員の多様性を抑えて、コースの一貫したやり方に合わせてもらえるように、さまざまな取り組みを教員に対して行なっている。この時期は、教員の質の向上ということに対して、かなり固定した考え方をしていたように見える。しかし、結局それが奏効することはなく、コーディネータとしての取り組みの方向転換、さらに教員の質に対する考え方の変更を迫られてしまっていた。

その後の取り組みには、できるだけ各教員の主体性を引き出し、それぞれの授業における問題意識や専門的な能力を活かすようなコーディネータを心掛けるようになっていく。それと同時に、コーディネータが上から指示をして、各教員がそれに従うと行った教員体制のあり方ではなく、各教員にもコーディネータと同様の問題意識を共有してもらい、互いに日本語教員として対等な立場に立って具体的課題を検討し合えるような、「教員コミュニティ」の形成をめざすようになっていくと見ることが出来る。別科論集第5号以後の改訂や別科論集「別科日本語教育」第8号の編集は、まさにそのような問題意識から出て来ていると考えることができる。

3.3.1.4. 学内に対してのプログラム・コーディネータとして

別科にしても、交流学生のプログラムにしても大学という社会的文脈の中において初めて存在できることは、それぞれのプログラムのあり方にとって大きな規定要因である。したがって、各プログラムが大学にとって一定の価値を有していることを学内において理解が得られないと、プログラムの存続そのものに関わってくる。その意味で、プログラム・コーディネータとして、説明責任を果たしていかなければならない。

嘱託講師という臨時的な立場では、なかなか正式な場面でそれを行なうことには限界がある。しかし、こうした学内への理解を求めるということを念頭において、いくつかの取り組みも行なってきた。別科においては、別科論集において前年度の別科の報告を行うようにしたのもその一つである。また、別科会議において、別科からの学部推薦者の選抜に関する提案（資料3A）を行なったり、平成18年度の前期末の講師打ち合わせ会においても、そうした点がある程度念頭において資料を作成したりしている。

交流学生のプログラムでは、定期的に担当部署である国際交流センターと打ち合わせを行なうだけでなく、担当する授業では日本人学生を活用したり、学内の先生方に協力をお願いしたりして来た。また、交流学生と一般学生（日本人学生や留学生を含む）との交流を目的とした会をプログラムの一貫として、3年あまり継続して行なってきた。

さらに、留学生教育という点から、大学の今後の日本語教育や国際化のあり方について提案も行なってきた。（大東文化大学留学生の日本語教育検討委員会 2004、大河原 2005）

3.3.2. コミュニティ作りとしての「実践」

ここまで見て来たように、コーディネータとして携わって来たそれぞれの日本語プログラムの姿は、多層的なレベルで実践活動が行われ、それぞれに多様な人々との関係の中で各々の実践が成立していた。この各レベルで行われた実践において、どのような一貫した基本的な理念があったのだろうか。

ここで注目したいことは、働きかけを行ったさまざまなレベル、立場の人々との関係である。日本語プログラムという実践が学生はもちろん教員、さらには学内の関係各部門の人々との関係の中で成り立っていたという事実がある。そして、その関係にそれぞれの問題状況を踏まえて、積極的に働きかけようとしていた実践の姿が浮かび上がってくる。実践としてそれぞれのレベル、場において働きかけていた関係性には、日本語教室内の学生同士の相互の関係、教育体制の中での各教員間関係、さらには、学内の大学教育という場における日本語プログラムと各学部学科などの関係部門との関係、またそこでの日本人学生と留学生との関係などがある。このように、それぞれのレベルにおいてその関係性全体に働きかけていたことがわかる。この関係性全体が、言わば「コミュニティ」である。

言い換えれば、これまでの11年間の実践が各レベルにおけるコミュニティ作りを目指して行われていたと見ることができる。そして、それぞれの関係性の中で日本語プログラムを捉えようとする中で、日本語プログラムの担うべき役割に対する見方が、ひとつずつ拡大してきた。より広い視野からプログラムの意味を捉え、コミュニティの中における役割を問題にしてきたのである。

プログラムの役割という観点から考えると、プログラムが、学生に対してだけあるのではなく、教員にも、学内においても一つの教育機関としても機能していることが分かる。その意味で、プログラムは、プログラムとの何らかの関係を持ち、そこに何らかの役割を期待している全ての人たちのそれぞれに対して、できる限り十分な機能を果たせるものでなくてはならないのである。また、そうしたプログラムであるためには、単にプログラムコーディネータだけでなく、そこに関わる全ての人々がそれぞれに責任を負っているのである。その意味で、プログラムという人為的な営みを介して、まさに、そこにある種のコミュニティが成立していることになる。

日本語プログラム・コーディネートとは、日本語プログラムという実践を、さまざまに関係する人々との連携を生み出し、関係性全体の中でそれぞれに機能させていくことだと考えることができる。このことは、野山(2003)が指摘する、多文化社会におけるコーディネータの存在の重要性とも共通する視点である。

4. 平成19年(2007年)度における別科

平成19年度の別科は、学生数の著しい減少を背景に当該年度限りで学生の募集を停止するという大学の決定から始まった。さらに、学生数も4名となり、それまで3クラス体制をとってきた日本語授業も、午前は学生の日本語レベルに関係なく一クラス、午後も2名ずつの二クラスとなった。また、週2コマの英語授業は4人全が一つのクラスで勉強することとなった。

4.1. 学生

全員で4名だった学生のうち、1名が著しい出席不良に陥ってしまい、前期の段階で何度か保証人を通じて注意を促したが、結局その後改善は見られなかった。こうした事情により、実質的には3名の学生で日本語、および英語の授業が進められた。

最後まで勉強を続けた3名の学生は、それぞれに日本語レベルが大きく異なり、ほとんど初級の前期レベルから始め、別科の1年の授業で初級終了程度のレベルに達した学生が1名、初級の総合的復習から始めて、中級の前半程度のレベルまで能力を伸ばした学生が1名、さらに初級の復習および中級の入門レベルから始めて、中級の後半程度のレベルにまで達した学生が1名であった。

4.2. 教育体制

これまで別科での授業全体の運営及び個々の学生に対する対応は嘱託講師3名がそれぞれのクラスの担任としてクラス毎に行ってきた。しかし、今年度は、そうした従来の体制で生じてしまう対応等の不均衡を是正するために、3名の嘱託講師うちの1名が責任嘱託講師として、授業全体の方針の決定や各教材の選定、個別学生への対応などを一元的に担う体制がとられた。

また、その他の別科の運営に当たっても、それまで3名の嘱託講師が合議で行ってきたものを、専任教員を含めた別科会議で、別科長を中心として行うように変更された。また、責任嘱託講師は、教育現場と別科会議との間を結ぶ役割も担うこととなった。

4.3. 日本語授業

前述したように、それぞれに日本語能力差の大きい3名の学生が一つのクラスで授業を行うこととなったため、一斉に授業を行うことは困難で、個々の学生の能力に応じた、個別指導のような授業を行わざるを得なくなった。しかし、できる限り学生間のやり取りが授業の中でも起きるような工夫がなされた。

午前の授業では、学生個々の教材に入る前に学生が互いに他の学生に話をしたり発表したりする機会を少しの時間設けるようにした。また午後では、各授業で各学生共通の教材を使ってそれぞれのコメントを表現させたり、各学生が書いている文章などをクラス全体で発表する機会を設けるといった方法で授業を行った。

こうすることで、一人一人の学生はそれぞれ別々の日本語学習上の目標があっても、他の学生の学習プロセスを知ること、あるいは自身の学習について発表することによって、日本語のレベルは異なっても、日本語学習という面において、情報の交換をしたり、時にはそれぞれの活動において助け合ったりできるような協調的な活動を通じた学習を授業全体の狙いとした。

4.4. プログラム・コーディネートとしての実践

最後に、これまで見てきたプログラム・コーディネートの点から今年度（平成19年度）の別科の実践を見ておきたい。今年度は、来年度の授業が行われないことが決定した中、学生数も4名ということで教員も嘱託講師3名がほとんどの授業を担当した。そのため、学内に対に理解を促す実践や非常勤講師を始めとする教員をまとめていく作業は必要なくなってしまった。

そこで、実践の対象は、一人一人の学生が中心となった。前項4.3で述べたような「ねらい」に沿って、互いの日本語レベルや、弱点や得意な点、また学習スタイルなどの違いを認め合い、その上で、それぞれの場面で協力し合いながら、各自のその時々の課題を達成していくといった、日本語学習のコミュニティが、一つのクラスの中に成立していたのではないかと考える。

5. 最後に

本稿では、今年度限りに幕を閉じることとなった別科において、これまで嘱託講師として行ってきた実践を振り返り、その意味を考えながら、この11年間のプログラム・コーディネートの実践全体を通じて目指してきたことを明らかにしようとしてきた。さらに、そこで得られた観点で、最後となる今年度（平成19年度）の別科での実践の報告を行うことを目的としていた。

これまでの実践を通じて、日本語プログラムをさまざまなコミュニティとの関連で捉え、それぞれのコミュニティにおけるプログラムの役割を積極的に果たそうとすることで、コミュニティ作りに関わろうとする実践の姿が見えてきた。

日本語の授業だけを見ていると、その実践の大きな意味を見失って技術面にばかり注意が向かってしまいがちである。しかし、日本語の授業だけでなく日本語プログラム自身が社会的文脈から孤立して存在しているわけではないことを、今回の考察を通して、

『別科日本語教育』第9号

あらためて認識することとなった。それと同時にプログラム自身が学生や教員といった内部のコミュニティによって成立していることも、今一度認識し直さなければならない。そうしたコミュニティにけるプログラムの役割を十分に果たしていけるような、プログラムの運営が必要である。それこそがプログラム・コーディネータに託された仕事といえるのではないだろうか。

日本語プログラムは、それぞれの関係するコミュニティの形成に積極的に関わりと同時に、そこで果たしうる役割をプログラム自身にも、さらにはそれぞれの関係するコミュニティにも問い続けていかなければならない。

参考文献

- 野山広 (2003) 「多文化主義の時代に不可欠なコーディネーターの存在 —日本語支援活動の展開に焦点を当てながら」『現代のエスプリ』432、80-92。
- 大河原尚 (1999) 「別科の現状と今後の展望」『別科論集』創刊号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2000) 「別科修了生の直面している日本語の問題」『別科論集』2号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2001) 「別科修了生の学部での学習に対する評価と取り組み —修了生五名のインタビュー調査から—」『別科論集』3号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2002a) 「日本語教師が教えようとしている「こと」の再考のために」『別科論集』4号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2002b) 「日本語教育日記の自己分析から見た「内省」」『世界の日本語教育』12号、国際交流基金日本語国際センター。
- 大河原尚 (2003) 「「実践報告」の可能性 —教師の成長という観点からの考察—」『別科日本語教育』5号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大蔵親志、大河原尚 (2004) 「別科の歴史」『別科日本語教育』6号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2004) 「別科日本語研修課程 この一年を振り返って —2003年度活動報告および今後の課題—」『別科日本語教育』6号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2005) 「大東文化大学における別科および留学生受け入れに関する問題と今後 —平成16年度日本私立大学団体連合会日本語教育連絡協議会における報告から—」『別科日本語教育』7号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2006) 「他者の経験を知ることの意味 —多様な確信(ビリーフ)を持つ教師と日本語コースのあり方に関する考察から—」『別科論集』6号、大東文化大学別科日本語研修課程。
- 大河原尚 (2007) 「「実践」と「研究」について：細川 (2007) 論文を読んで」、電子掲示板『実践研究プラットフォーム』への投稿、NPO法人言語文化教育研究所主催。
- 大東文化大学 留学生の日本語教育検討委員会 (2004) 「「留学生の日本語教育」に関する答申 —国際教育・研究センター設置について—」。

〈資料 1A〉

年間授業計画

1. 一年間の授業予定

全体を能力別に3つのクラスに分け、3つのクラスとも4月にゼロからスタートすることとしました。その上で中間のクラス（速くもなく遅くもない速さで順調に進むクラス）を想定し、その進度を標準として計画を立てました。したがって、上のレベルのクラスは、標準の進度より早く、下のクラスはゆっくり進んでいくことになります。

以下標準の進度について説明することとします。

一年間の授業を次の三段階に分けて進む計画です。

①初級

教科書は「新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ」を使用し、4月から7月までの前期で終了する。その際「新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ」の全課をするのではなく、特に別科の初級段階で触れる必要のないと思われる課および学習項目を省略し、計41課分を前期中に終えることとする。

②初級復習

初級終了後、初級で学習した項目をもう一度復習し、中級への橋渡しとすることを目的とし、4-5週間程度で終了する。（9月-10月）

③中級

初級、初級復習を踏まえ、11月ごろから中級へ進みたい。

（以上詳細は、「授業の進め方」で）

2. 初級の進度予定

「新日本語の基礎Ⅰ、Ⅱ」の全50課を計41課に短縮し、目安として、1週間に2.5課程度進み、前期中に終えたいと思います。なお、短縮した全41課の一覧と各課の進度予定は添付した資料（全41課一覧と学習順序、進度予定表）を参照してください。

3. クラス編成について

進度予定表で示した通りに、以下の二つの理由から年間で合計4回のクラス編成を予定しています。

- ①各クラス内の学生のレベルを調整し、効率的なクラス授業および学生の進歩を促す。
- ②クラス編成を複数回行うことにより、怠けていれば下のクラスへ落ち、頑張れば上のクラスへ上がることができるという気持ちを持たせ、学生のやる気

につなげる。

また、クラス編成は、各課の復習テストと各担当の先生方の普段の授業での評価を参考に行いたいと思います。

*クラス編成の時期であっても、検討の結果特にその必要がない場合は、学生の入
れ替えを行わないこともあり得ます。

*クラス編成によって、学習項目がぬけてしまった場合でも、その学生にあわせて
授業（午前）では補わないことにします。各クラスの進度を優先させてください。

〈資料1B〉

授業の進め方

1. 初級（前期）

a. 午前

- ①「新日本語の基礎」の一課を次の二つのパートに分ける。
- ・「文型」「例文」「練習A」「練習B」:(パート1)
 - ・「会話」「練習」「問題(聴解、読解は除く)」:(パート2)
- ②上のパート1とパート2は、互いに進度を調整せず単独で進んでいく。また、パート1は2限目、パート2は1限目に行い、どちらも二日で一課を終了する程度の進度で進む。

例)

	月	火	水	木
I	第3課(2)	第3課(2)	第4課(2)	第4課(2)
II	第4課(1)	第4課(1)	第5課(1)	

- ③毎日の1、2限目の授業では、
全90分のうち60分程度をパート1とパート2の作業に当て、
残りの30分で、

- a. 書き取り（語彙や文）とその答えあわせ、又は
- b. 「会話」を暗唱、発表させ注意を与える
のどちらかを行う。

b. 午後

午後は、午前と異なり各コマ別々に以下の六つの内容の授業を行う。

- ①「新日本語の基礎」の復習 (日本語演習16)
- ②「新日本語の基礎」の各課の復習テスト (日本語演習13)
- ③表現 (日本語演習15)
- ④音声／文字 (日本語演習12)
- ⑤理解 (日本語演習14)
- ⑥日本事情

(具体的な内容については別紙「初級午後の授業について」参照)

*午後の授業は、停滞した雰囲気になりがちなので、授業中の課題・作業をどんどん与えて、教員が学生をリードしていくようにしたい。

*午後のクラスは、午前の二つのクラスからの学生で構成されるので、午前の進度

と関係する授業での進度は、学生数の多い午前のクラスの進度に、原則として合わせることにする。

*原則として宿題は出さない。

2. 初級復習

「新日本語の基礎」の全41課が終了した後、すぐに中級へは移らず、初級の復習の期間を設ける。

目的：

「新日本語の基礎」で導入・練習してきた文型や語彙をもう一度総合的に復習し、中級への橋渡しとする。

「新日本語の基礎」で扱いきれなかったり、ぬけたり、忘れてしまったりした学習項目をカバーし、初級学習項目の再確認を行う。

教材と内容：

具体的には現在検討中だが、以下のような方針で進めていくこととする。

- ・読解形式の教材を用い、中級での学習形式に慣れる。
- ・中級での学習の重点を言語そのものから内容へと徐々に移行させるために、その準備として、初級の確認をしながら、内容にも注意を向けさせる。
- ・読解の他にも、まとまった長さの聴解練習も行う。

期間：

4から5週間程度とし、午前の授業で行う。

なお、その間の午後の授業は初級の時からの内容を継続する。

*「新日本語の基礎」で扱わなかった課のうちのいくつかを追加分として、三課分にまとめてこの時期の行う。

- A：自動詞と他動詞の整理
- B：丁寧体、普通体、敬語
- C：受け身・使役のまとめ

3. 中級（後期）

初級、初級復習を経て、中級に入る。

中級では、一定の中級用の教科書を使用し、それまで午後で行っていた「表現」「理解」に重点を置いた授業を午前で行い、午後の授業内容も初級時に行っていたことを変更する予定。

a. 午前

中級用教科書「テーマ別中級から学ぶ日本語」を用い、初級午後で行っていた「表現」「理解」の授業を踏まえ、より発展的かつ組織的に授業を進め

『別科日本語教育』第9号

る予定。また初級時と同様にリレー式で行う。

* 具体的内容については検討中。

b. 午後

初級午後の授業のうち「音声／文字」「日本事情」はそのまま継続して行う。残る三つの授業では、それぞれが別々の内容の授業を行い、各コマが何らかの目標にに向かって進むか、または修了後の大学生活や学生の将来に具体的に役立つことを授業の内容とすることを基本的な方針としたい。

* 具体的な内容については検討中。

* 初級午後から中級午後への切り替えは、合同になっているクラスのうちの下のクラスの進度に合わせることを原則とする。

〈資料 1C〉

初級午後の授業について

1. 「新日本語の基礎」の復習

- ・午前で終了した課の練習プリントをさせ、個々に指導を行うことを基本とする。
- ・練習プリントは、三種類(A、B、C)全てを一様にさせるのではなく、授業では
Aは必須、Bは準必須、C選択
とし、学生の進歩によって、進歩の速い学生にはB、さらにCと進ませ、遅い者にはAだけでとどめておくというようにする。
- ・練習プリントをさせながら、必要があれば随時説明や練習を取り入れていく。
- ・各学生が復習の時間内にできなかったプリントについては、その場で学生に渡さず、後でまた使用することとする。

*学習事項の整理のため学生に渡すべき資料(動詞の表など)はこの復習の時間で渡す、練習することしたい。

2. 「新日本語の基礎」の各課の復習テスト

- ・午前で終了し、復習も終了した課の復習テストを実施し、テスト回収後、答え合せと解説をする。
- ・進度は、原則として一時限で2課分のテストを行うこととするが、午前の進度によって弾力的に対応する。
- ・回収したテストは嘱託講師が採点し、翌週返却する。

3. 表現

目標：

- ・学生自身の身の回りの事柄や意見／感想などを日本語にまとめて表現する練習をする。(文章、口頭の両面で)
- ・それに伴い、使用できる語彙を増やす。

アプローチ：

- ・まとまった長さの文章や音声テープ、ビデオ等と組み合わせて、そこから得た知識や情報、意見や感想などを話させたり書かせたりして表現させる。
- ・表現活動の前提となる表現パターンや語彙を紹介し、それらを使って学生の発想を刺激し自由に表現させる。

*具体的な教材や授業での扱い方は、担当者に一任することとしたいが、この時間の主旨や教材、クラス作業などについて不明な点があれば、嘱託講師と相談したい。

*また、初級午前の授業で扱わない学習項目の一部(第40課の3、第42、44、45課)

『別科日本語教育』第9号

について、この表現の時間で表現パターンの一つとして扱いたい。

4. 音声／文字

目標：

- ・日本語の音声と文字を結び付ける。
- ・ひらがな、カタカナの読み書きの定着を図る。
- ・年間を通じて行い、漢字の読み書きの導入と練習を行う。

アプローチ：

- ・音声や文字だけを単独で取り上げるのではなく、文や音声テープ、ビデオ等を用い、文脈を意識させながら導入・練習を行う。
- ・また、音声や文字を単独で取り上げた場合でも、必ず文脈の中に戻して確認する。

*具体的な教材や授業での扱いは、担当者に一任することとしたいが、この時間の主旨や教材、クラス作業などについて不明な点があれば、嘱託講師と相談したい。

5. 理解

目標：

- ・談話全体の中から文脈をとらえて理解する練習を行う。
(文章と音声の両面で)

つまり、初級の学習では言語そのものに学生の注意が集まり、全ての語彙や文法がわからなければ、全体の理解も進まないという傾向に陥りがちである。そこで、初級の早い時期から、多少不明なことばや表現があっても、全体の大意をつかんだり、不明な点を想像して補ったりして理解する練習を行う。

アプローチ：

- ・予め内容について触れておいた上で、文章や音声テープ、ビデオ等を示し、その内容の一部あるいは全部を話させたり書かせたりして要約させる。
- ・上のような場合に、全体やまとまった一部分を対象にするのではなく、予め示しておいたキーワードを拾い出させたり、また学生がキーワードだと思ったことばを言わせたりする。
- ・言語材料だけではなく、視覚的な材料や生の教材も、教材として工夫できる。

*具体的な教材や授業での扱いは、担当者に一任することとしたいが、この時間の主旨や教材、クラス作業などについて不明な点があれば、嘱託講師と相談したい。

*新日本語の基礎の問題の中にある聴解や読解の部分をその課が終了後、まとめて

この時間に行う。

6. 日本事情

- 年間を通じて行い、日常生活に必要な表現や語彙から、現代日本に関する知識まで日本語通じて獲得する。
- 嘱託講師が担当し、午前午後の進度の調整を行う。

〈資料 1D〉

「みんなの日本語」終了後の授業計画について

目 標

年度初めに年間を通しての目標として、次の2点を設定しました。

- ①いわゆる「初級」で取り上げられている文型（文法事項）と基本的な語彙を一通り習得する。
- ②その上で、それらを活用しながら、全体的な文脈の中で理解及び表現する能力を身につける。（例えば、単文による表現時の文法形式の選択、単文間の繋がり
の理解、文章での段落ごとの理解や表現、など。）

「みんなの日本語」では、上の①に重点を置いて行なってきましたが、今後は②を重点に、全体的な文脈に注意させながら、進めていきたいと思えます。

もちろん、「みんなの日本語」が終了したとはいえ、初級の学習事項（文型と語彙）が十分に定着しているとはまだ言えません。しかし、その定着にばかり固執しては、目標②の、全体の文脈に注意を向けることができなくなってしまいます。といっても、初級の文型などに一切触れないのではなく、必要なのは文脈の中で出てきた時に、その事柄につて随時確認することによって全体的な文脈の理解や表現に結び付けて行くことであって、系統だって扱わないということです。むしろそれは、午後の時間に行ないたいと思っています。

授業の進め方

「みんなの日本語」では、各課をパート1とパート2に分け、それぞれを2時限目と1時限目に割りふって進めてきました。今後も1時限目と2時限目とでそれぞれ目標を定め、それに合わせて教材を進めていきたいと思っています。

・ 1時限目

ねらい：「みんなの日本語」終了直後のレベルとしては、やや難し目（語彙や文型など）の文章を、全体的な意味やテーマについて考えながら読んだり聞いたりして、理解する。そうすることで、全体的な意味に注意しながら理解しようとし、多少わからないことがあっても、それにこだわらず何とか理解できるという態度を養いたい。また、それと並行して、語彙力向上のための手当ても行なっていきたい。

教材と計画進度：教材は、「テーマ別中級から学ぶ日本語 ワークブック」の「速読」の文章を読解教材として、「聴解Ⅱ」を聴解教材として使用する。具体的な扱い方については事項で。

進度については、第1課から「速読」「聴解Ⅱ」をそれぞれ一時間ずつ、計2時

間を一課分の一応の進度としておきたい。実際的な進度は学生の反応を見ながら、その都度検討していきたい。

学生への教材の配布について、「速読」の本文は予め何課分かをまとめて渡しておき、学生が各自で予習できるようにしておきたい。しかし、それに付随する問題は授業の際に配布し、授業を進める上での手掛かりとしたい。

主な授業内容：ここでは、必ずしていただきたい活動だけを示しておきますので、学生の反応、その他などを考慮して、それ以外にも必要だと思われることは随時行なっていただくようお願いします。

「速読」：(1).まず、テーマ(内容)についての準備のために簡単なイントロダクションを行なう。これは、ただ単にキーワードについて話させたりしてもいいですし、本文を教師が読んで聞かせるだけでもかまいません。

(2).次に、学生に本文を読ませて、付随の問題および、その解答の確認をする。

(3).最後に、その課（「速読」と「聴解」）に出てくる語彙について事前に予習しておくことを課題として学生に課しますので、そのチェック。

「聴解Ⅱ」：(1).まず、聴解のテープを一通り聞くこと。学生の反応によって、初めから終わりまで一度に聞かせたり、内容的に区切って聞かせたりするなど、どんな聞かせ方でもかまいません。

(2).次に、付随の問題のうち、A（選択肢を選んで答えるもの）だけをし（Bはしない）、その解答の確認。

(3).最後に、聴解テープのスクリプトを見ながらテープを聞いて、授業の中で聞いた内容を目を見て（文章で）確認。

（*この時間では、できるだけ学生が納得するまでテープを聞かせたいと思っています。）

・2時限目

ねらい：「みんなの日本語」で学習したこと（主に文法や文型）を使いながら、文章の全体的な意味やテーマに注意して、文章で表されている内容を理解する。さらに、そこで理解したことをもとに自らの考えや客観的な事実の表現へと結び付けていく。そうすることで、その場で話題となっている事柄の全体的な意味を踏まえながら、理解したことをもとに、できるだけ表現したい内容を正確に表現していこうとする態度を養いたい。また、それと並行して、語彙力向上のための手当ても行なっていきたい。

教材と計画進度：教材は、「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ 初級で読めるトピック25」の「本文」の文章を主教材とし、「プラスアルファ」を余裕のあるときに補助教材と

して使用する。具体的な扱い方については次項で。

進度については、一時間で一課を進むこととおきたい(第21課あたりから)。なお、実際的な進度は学生の反応を見ながら、その都度検討していきたい。

学生への教材の配布について、「本文」は予め何課分かをまとめて渡しておき、学生が各自で予習できるようにしておきたい。しかし、それに付随する問題、及び「プラスアルファ」は授業の際に配布し、授業を進める上での手掛かりとしたい。

主な授業内容：ここでは、必ずしていただきたい活動だけを示しておきますので、学生の反応、その他などを考慮して、それ以外にも必要だと思われることは随時行なっていただくようお願いします。

「本文」：(1).まず、学生に本文を読ませて、付随の問題Ⅰおよび、その解答の確認をする。この時、問題についている選択肢は始めから学生に与えずに、文章を読んで自分で解答の文を作ってみる。むしろ選択肢は教師側の授業の手掛かりとしたい。

(2).次に、付随の問題Ⅱ。この問題Ⅱは、様々な教室活動へのきっかけとなるような指示が書いてあるので、それを使って様々な活動に発展させてみてください。

(3).最後に、その課の「本文」に出てくる語彙や表現についての簡単なクイズを行いたいと思います。クイズについては、こちらで用意します。

・午後(月/3、火/3、火/4、金/2、金/4)

ねらい：

- ①.「みんなの日本語」で学習した文法・文型の復習。既習の知識を再度整理する。
- ②.どちらかという、理解することが中心になっている午前の授業に対し、作文による表現を目的とした授業行なう。単文レベルから徐々にまとまった文章による作文表現へと進みことによって、文法的な正確さだけでなく、文章全体の構成やわかりやすさにも注意を向けて表現しようとする態度を養う。
- ③.いわゆる「速読」。長文を一文ずつ読んでいくのではなく、不必要なものは捨て、必要な情報や全体の要点を素早く得るといった読み方を紹介する。時間的な余裕がないため、そうした技能を身につけさせるまで練習することはできないが、日本語の文章の読み方が一つだけではないことを知らせ、その後の練習は各自の努力に任せたい。

授業内容と教材：

授業の内容、進め方及び使用教材については、上のねらいを踏まえ、担当者と個別に打ち合わせたい。

『別科日本語教育』第9号

〈資料 1E〉

第2回 講師打ち合わせ (Iクラス)

I. 「みんなの日本語」以前

《プリント「第1課に入る前に」》

教科書の第1課に入る前に、日本語の音声で行なわれる授業に慣れるためにということで、①あいさつ、自己紹介、他者紹介などと、②第1課から第6課までの抜粋の2種類の教材を用意しました。

①のあいさつ、自己紹介等の教材では、学生が聴いて分かることはもちろん、そこにある表現を使って、先生あるいは、他の学生と日本語による口頭でのやりとりが出来るようになることを目指しています。ですので、文字に頼らず、耳で聞いて、日本語表現の音調や拍感覚、及び表現の意味を認識し、自ら発話してみて、相手とのやりとりが行なえるようになるまで練習することとしたいと思います。

また、教材②では、3月6日の講師会でお話したように、各課の学習項目を、普通の授業でしているように、導入(理解を確かめるための練習も含む)することで、日本語の音声による授業に慣れさせたいと思います。なお、各授業で扱う導入項目は、第1課から第6課の中からやりやすいものを任意に選んで行なってください。

ただ、気をつけていただきたいことは、第1課から第6課までの教材は項目の積み上げ式になっていますので、前の課までの項目が入っていないことも起こり得ますので、ご注意ください。

II. 「みんなの日本語」開始

《第一課の開始に際して》

今回、「みんなの日本語」の開始を、当初の計画よりもかなり早めに(4月15日から)行なうことにします。そのため、音声に慣れるという目的が(全ての学生について)十分に達せられているか、実際のところ多少不安の残る面もあります。また、文字に関しても、一文字ずつなら音声との対応ができますが、語彙(音連続)の場合には、まだ問題があるようです。

そこで、第1課に入ってから、音声(特に語彙の表記との対応において)に慣れるということを念頭において、授業を進めていきたいと思います。例えば、導入や練習の際に通常の授業より多めに聞かせるとか、リピートを多めに行なって口で言わせるなど。

《授業の進め方》

「みんなの日本語 I」に入ってから、各課を以下のようにパート1とパート2に分けて、リレー式で授業を進めて行きます。また、各授業の中で、一つ前の課あるいは、

前回ご自分の行なった授業の内容の復習を必ず行なってください。(尚、全体を通しての復習及び文字に焦点を絞った指導はリレー以外の時間で行ないます。)

パート①：(口頭による導入中心で)

(「一つ前の課、あるいは前回の授業の復習」)

各課の文型や文法項目の導入：

教科書を見せずに、絵教材等を使用して、口頭で導入を行なってください。また、導入の際に使用する語彙は、基本的に既にそれまでの課で学習したものにし、学生には文法項目の意味の理解に集中できるようにしてください。

「練習A」：

文型や文法項目の導入の後、練習Aを見ながら(読みながら)、直前で導入した項目の構造を確認させてください。この時の目的は文構造を知ることですので、練習Aに出てくる新出語彙やカタカナ表記はその都度触れてください。

各課の語彙の導入：

語彙の導入というよりも、「練習B」を、教科書を見ないで、口頭で(例えば、教師が解答例やキョウを読んで、口頭で学生に答えさせたり、文が長い場合には拡張練習のようにして練習したりして)できるだけクラス全員が出来るようにしてください。

その際に、新出語彙があれば、「練習B」での練習が中断されてもかまいませんのでその文の文脈の中で説明したり練習したりしてください。

パート②：(表記との対応、および学習項目の理解の確認)

(「一つ前の課、あるいは前回の授業の復習」)

「文型」「例文」「練習B」：

教科書の「文型」「例文」「練習B」を読ませて(音で聞けば、意味は理解できるはずですから)、音声で理解しているものを文字で確認させて、音声と表記の対応を図ると同時に、再度(文型、語彙の)意味を確認するようにしてみてください。

「練習C」：

まず、テープを聞かせて内容を理解させてください。その際には、口頭で、内容についての質問をしたり、その場で会話文を覚えさせたりすることもできると思います。

また、口頭で練習したら、(教科書の)会話文を見せ、読ませることで、表記との対応を図って行きたいと思います。

「問題(読解問題は除く)」：

最後に、当該課のまとめとして問題を行ないます。聞き取り問題は、簡単な解答でもかまわないので、聞かれたことを的確に答えられるようにしてみてください。

(「プリント」:現時点では、リレーの中に入れませんが、今後学生の様子を見て、パート

『別科日本語教育』第9号

2に組み込むことも検討したい。)

*当面は、上記の形で進めて行きたいが、学生の上達具合、進度や授業のしやすさ等を考慮し、随時各パートの内容や方法については柔軟に対応したいと思います。

*バングラディッシュからの学生については、まだひらがなが他の中国人学生とは差があるようなので、読ませたり、書かせたりする際にはご考慮ください。因みに、その学生への文字の練習はリレー以外の時間で行なう計画です。

〈資料 1F〉

平成 15 年度 別科講師会

平成 16 年 3 月 12 日

1. 一年間の授業予定

- ・今年度も、昨年度と同様に全体を能力別に I、II、III の 3 クラスに分けて授業を行います。
- ・各クラスは、担当の嘱託講師がそれぞれ具体的な進度や授業内容を決定していきます。
- ・各クラス毎に、担当の先生方でそれぞれ打ち合わせの機会を持ちたいと思います。打ち合わせでは、その都度個々の学生またはクラス全体の状況を把握し、具体的な授業内容や方法、進度を検討し、その時の状況に合わせた柔軟な対応ができるようにしていきたいと思います。

2. クラス編成について

昨年度までと同様に、授業開始前にクラス編成を行ないませんが、当初、特に 4 月から 5 月にかけてのクラス編成は流動的になると考えています。

その後も、必要があると認められた場合には、その都度柔軟に対応していきます。そうすることによって、各クラス内の学生のレベルを調整し、効率的なクラス授業および学生の進歩を促すことを目的としています。

3. 別科での日本語教育に関する基本的な方針について

上記のとおり、実際の授業では、全体を 3 クラスに分けてそれぞれのクラスのレベルや学生の特徴に合わせて具体的に進めて行きますが、別科全体として、つまり 3 クラス共通の授業の方針として次の 3 点を考えたいと思います。

1. 初期の学生に対しては文法や文型を中心とした授業を行い、授業が進むにつれて、徐々に文法や文型から、内容を重視し、トピックを中心とした授業に移行していく。
2. 別科の日本語教育の基調として、いかに表現するかということよりも、「理解」に重点を置く。
3. 学習の焦点が、細部から全体へと広がるように授業を進める。

『別科日本語教育』第9号

以上の点は、一年間の別科の日本語教育での基本的な考え方として、各クラス担当者(嘱託)は、これらの点を考慮し、それに沿った形で、具体的計画(教材や授業方法など)を決めていくこととしたいと思います。

〈資料 1G〉

第 1 回 講師打ち合わせ (Ⅱクラス)

I. Ⅱクラスの想定と目標

《想定として》

原則としては、ゼロからのスタートとして考えて、授業を進めていくこととします。(但し、ひらがなに関しては一通りの知識があることを前提とします。したがって、そのために授業の時間を使うことは考えていません。)

しかし、実際は、全くのゼロということではなく、事前に日本語の知識や能力を多少持っていることを前提として考えますが、それはゼロからの授業開始に当たって問題にならない程度のものだと考えるということです。

むしろ、大事なのは、できるだけ早い時期に、日本語の音声を聞いて分かるようにし、その後の授業(日本人の教師による日本語での授業)をスムーズに進めて行けるにようにすることです。

《一年間通しての目標》

- ①いわゆる「初級」で取り上げられている文型(文法事項)と基本的な語彙を一通り習得する。
- ②その上で、それらを活用しながら、全体的な文脈の中で理解及び表現する能力を身につける。(例えば、単文による表現時の文法形式の選択、単文間の繋がり、文章での段落ごとの理解、文章全体の構成的な理解など。)

II. 授業の進め方について

《一年間を通して》

前半は、原則として、ゼロからのスタートということで、基礎的な文法事項と語彙を、一回限りというのではなく、違う教師によって、異なるタイミングで、さまざまな文脈の中で、それらの学習項目を螺旋状に扱っていくことにより、徐々にかつ着実に習得を図っていきたいと思います。主教材には「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」を使用します。

また「みんなの日本語Ⅱ」の途中あたりからは、徐々に文法中心から内容中心の授業へと移行し、「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」以降は、できるだけ多くの文章や音声に触れさせ、学生のレベルや意欲を引っ張りあげていくようにしたいと思います。

《「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」》

「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」(第1課～第50課)では、従来通り、各課(付随する副教材を含む)をパート1(2時限目(ただし、水は3時限目))とパート2(1時限目)に分け、リレー式で進めていきます。

また、各授業では、必ず前日あるいは前回の復習をするようにしてください。

『別科日本語教育』第9号

復習の方法や内容は特に定めませんが、学生の様子や授業の進み具合を考慮して行ってください。

パート1：前日（または前回）の復習、
新出事項の導入、
その確認として「文型」「例文」、
整理として「練習A」（あるいは「練習B」）

パート2：前日（または前回）の復習、
新出事項（パート1での導入事項）の確認、
文脈の中での練習、あるいは聞き取りの練習として「練習C」、
最終的な整理と練習を兼ねて「問題（読解問題は除く）」

- * 各パート1、2での作業の順番は特に決めませんので、その時々状況や教授内容によって教えやすいような順番にしてください。
- * パート1、2それぞれを平均2コマ程度終わられるような進度を今のところ考えていますが、具体的な進度については、授業をしながら各担当者と相談して行きたいと思います。
- * まとめの復習、読解、会話など及び週間試験は、リレー以外の時間で行なう予定。

《「みんなの日本語」以降》

「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」終了後は、それまでの復習をしながら、**理解（聴解、読解）**に重点を置いて授業を行いたいと思います。もちろん、話させたり、書かせたりしないというのではなく、読解や聴解で理解した内容を前提としたり、あるいは理解に結び付くような活動として行うことも出来ると思います。したがって、表現のこまかい方法やまちがいはそれが理解する際の問題にならない限り、特に取り上げないということです。

具体的な教材や授業の進め方などは、後日決定し連絡します。

ただ、「理解」と言ってもさまざまなタイプの理解のし方があると思いますので、次の3つの、理解のし方を考慮して、具体的な教材や授業を決定していきたいと思っています。

- ①全部わかることを目指す。
- ②わからない語彙や表現が多少あっても、文の構造や知っている語彙でそれを補い、全体的な理解を目指す。
- ③ほとんどがわからない状況で、キーワードや文脈を手がかりに、自分なりの理解を目指す。

Ⅱクラス リレーの連絡順

	月	火	水	木	金	土
パート2 →	茜	茜	大河原	塩田	井上	塩田
パート1 →	茜	茜	(英語)	塩田	井上	塩田
	(大河原)	Ⅱ、Ⅲクラス合同 (清水)	松嶋	(英語)	(大河原)	
		Ⅱ、Ⅲクラス合同 (大河原)		(週間試験)		

*進度の調整は、月曜と金曜3時限目(大河原)で行なう予定です。

Ⅲ. Ⅱクラス講師打ち合わせ

今年度(平成16年度)も、学生の状況を把握し、具体的な授業内容や方法、またその進捗について、各担当の先生方と随時検討していくこととしたいと思います。

《打ち合わせの日程と方法》

原則として 毎週一回 の予定です。しかし、各担当の先生方は集まれる日がないので、各先生方と嘱託講師とのその都度の打ち合わせと言う形としたいと思います。

《打ち合わせの基本的な内容》

①学生について

個々の学生、クラス全体の進捗及び学習姿勢(雰囲気)などの評価・感想(週間試験の結果報告もむ)。

②授業について

①での学生の様子や状態を踏まえて、当面の進捗の見通し(いつごろまでにどの程度進める、あるいは進めたいなど)、及び授業の進め方や授業をする上での留意点などを。

③その他の問題

授業をしていたり、学生と接していたりして各先生方が気いたこと(学生、授業、教材や週間試験問題など何でも)。

《一週間の進捗予定と連絡について》

全ての課に一樣の時間を割り当てるのではなく、時間をかけたい課や簡単に済ませたい課もあります。また、その時々学生の状況を見て、随時進捗の調整を行なって行きたいと思っています。ですので、特に始めは、その日に先生方から進捗及び学習状況の報告を受けて、翌日の進捗の確認をしたり、計画を立てたりしたいと思います。そのため、こちらからも、綿密な連絡を心掛けたいと思っていますので、御協力お願いします。

〈資料 1H〉

第1回 講師打ち合わせ (Ⅲクラス)

I. 新学期の開始に当たって

今年もまた、新しい学生が来ます。別科としての目標は変わらなくても、学生の抱えている問題や状況は常に新しいものです。その意味で、我々教師も、自身のそれまでの経験は経験として、常に新しい気持ちで学生に臨みたいものです。

コミュニケーションは、時々キャッチボールにたとえられることがあります。そこで、学生は日本語というボールの投げ方や受け方を学習するのです。学生は自分が欲しいと思っているボールを正しく返してもらうために、どのように投げたらいいのか。その返って来たボールと欲しかったボールの違いによって学生は学んでいくものだと思います。我々教師は、ときには忠実な「壁」となってボールを返すことも必要だと思います。また、学生が自らボールを投げようとする仕掛けを用意することも我々教師の役割かもしれません。

II. Ⅲクラスの想定と目標

《想定として》

原則としては、いわゆる「初級」で学習する文法事項（例えば、「みんなの日本語1、2」に出ている文法・文型）についての知識は一通り持っていることを前提に考えたいと思います。したがって「中級からのスタート」ということにしたいと思います。

しかし、実際は、知識があっても、それらを使いこなしてコミュニケーションができるとは限りません。また、学習者によって知識の偏りも考えられます。そこで「初級」レベルの基礎的な知識（文法、文型の知識）を確認するところから始めたいと思います。

また、学生によっては、日本人教師が日本語でコミュニケーションをしながら進めるといった形態の授業の経験が少ない場合もあり得ますので、特に授業開始時期には、十分に日本語で話してコミュニケーションできるようにしていきたいと思います。

《一年間通しての目標》

- ①いわゆる「初級」で取り上げられている文型（文法事項）と基本的な語彙を習得し、十分に使いこなせるようになる。
- ②その上で、それらを活用しながら、全体的な文脈の中で理解及び表現する能力・技術を身につける。（例えば、単文による表現時の文法形式の選択、単文間の繋がりでの理解、文章での段落ごとの理解、文章全体の構成的な理解など。）
- ③また、語彙や表現文型、特にアカデミックな場面でよく使われると思われる

ものを増やしていく。

II. 授業の進め方について

原則として、中級からのスタートということですが、特に基礎的な(初級として扱う)文法事項や語彙は、違う教師によって、異なるタイミングで、さまざまな文脈の中で、何度も螺旋状に扱っていくことにより、徐々にかつ確実に習得を結び付けていきたいと思えます。

また、一方で(特に読解、聴解教材を使用した授業では)、それまでの文法・文型中心から内容中心の授業へと移行し、できるだけ多くの文章やテープに触れさせ、学生のレベルや意欲を引っ張りあげていくようにしていきたいと思えます。

尚、授業は全て基本的に、各担当教師が担当したところを翌日の同じパートの授業を行なう教師に連絡し、引き継いで行くという、リレー式で進めていきます。

《一年間通しての計画》

原則として、午前の1時限目を「パート2」、2時限目を「パート1」として二つに分け、各パートはそれぞれの目的のもと、異なる教材で授業を進めていくこととします。

まず、最初の8週間程度(5月末～6月初め)までは、初級の復習として「みんなの日本語Ⅱ」を1時限目に、「みんなの日本語 初級で読めるトピック25」を2時限目に教材として使用したいと思えます。ここでは、初級の文法・文法事項の知識を確認(及び導入)して練習することと語彙の補充をしながら文章を読むことに慣れていくことを目指します。

その後、最初の8週程度を過ぎてからは、パート2(1時限目)では、中級用読解教材を使つての長文読解の練習において、特に文章全体としての内容を把握すること、また文章を構造的に捉えることに重点を置いて、授業を進めたいと思えます。

また、パート1(2時限目)では、中級用聴解教材を使用して、できるだけ少ない試聴で、話の大きな流れや大意を理解できるように練習したいと思えます。また、そうするために語彙を増やし、さまざまな文脈的な要素にも注目させ、ダイナミックに話の内容を捉えようとする姿勢を養うことを目指したいと思えます。

その他の時間では、速読や聴解の技術やストラテジーなどに注意を促がし、午前の1、2時限目の授業で応用できるようにサポートしたいと思えます。また、文法・文型の再確認や表現文型の提示・練習もこの時間で行ないたいと思えます。尚、この時間は大河原が担当します。

《初級復習(最初の8週間ぐらいまで)》

「みんなの日本語Ⅱ」: 1時限目(パート2)

原則として「みんなの日本語Ⅱ」(第26課～第50課)から始めたいと思えますが、最終的には学生のレベルなどを見て授業開始時に決定したいと思えます。

また、各授業では、まず最初に必ずその教師が担当した前回の授業の内容に、

『別科日本語教育』第9号

少しだけでもけっこうですから、触れるようにしてください。復習の方法や内容は特に定めませんが、学生の様子や授業の進み具合を考慮して行ってください。とりあえずの想定として、一課を2コマで確認しながら進めて行ければと思います。授業では、

《1コマ目》

- ・「問題」(落ちている点を確認するために)
- ・そこで学生の理解が不十分だった、その課の学習項目について導入・練習(この時、各課の「練習A、B」「文型」「例文」等を使ってみてください。)

《2コマ目》

- ・「練習C」(文型や状況の理解を確認する。必要なら練習しても)
- ・「練習プリント」(その課の学習項目の理解を最終的に確認する。)

「みんなの日本語 初級で読めるトピック25」: 2時限目 (パート1)

最初は短くて読みやすい課から始めたいと思いますが、開始する課は学生の状況などを見て授業開始時まで決定したいと思います。

原則として、2コマで1課(「プラスアルファ」も含む)の目安で進めて行ければと思います。まずは、文章を読むことに慣れる。さらに、文章を一文ずつの内容の理解を積み上げるだけでなく、文の構造を示しながら理解させることを考えたいと思います。(別添の『ことばを覚えましょう』参照)

一応、次のように授業内容を考えました。

《1コマ目》

- ・前日に学習した課の「本文」について内容の確認
- ・プリント『言葉を覚えましょう』(2種類)

《2コマ目》

- ・新しい課の「本文」(事前に配布済み)の読解
- ・読んだ本文に関する付随の「問題」
(特に、学生に意見や、事情を話させる問題では、実際に話させてみる。)
- ・「プラスアルファ」が付いていれば、それを使っての発展的な活動

『言葉を覚えましょう』のプリントを、本文を読んだ同じ時間に行なうのではなく、時間を置いて再度「本文」の内容を思い出すことで、文法項目の再確認や語彙・表現の定着を図りたいと考えています。

【配布プリント】

『言葉を覚えましょう』(2種類)

『本文』(及び『プラスアルファ』)での語彙の翻訳

『本文』に関する問題

『プラスアルファ』

《中級（8週間過ぎぐらいから）》

基本的な方針としては《一年間通しての計画》で上述したように、読解、聴解教材を使った授業を行なう計画です。

原則として、先ず優先させたいのは、**理解（聴解、読解）に重点**を置いて授業を行うということです。もちろん、話させたり、書かせたりしないというのではなく、読解や聴解で理解した内容を前提としたり、あるいは理解に結び付くような活動として行うことも出来ると思います。したがって、この段階では、表現のこまかい方法やまちがいはそれが理解する際の問題にならない限り、特に取り上げず、分かったという自信をつけることを先ず考えたいということです。

具体的な教材や授業の進め方などは、後日決定し連絡します。

ただ、「理解」と言ってもさまざまなタイプの理解のし方があると思いますので、次の3つの、理解のし方を考慮して、具体的な教材や授業を決定していきたいと思っています。

- ①全部わかることを目指す。
- ②わからない語彙や表現が多少あっても、文の構造や知っている語彙でそれを補い、全体的な理解を目指す。
- ③ほとんどがわからない状況で、キーワードや文脈を手がかりに、自分なりの理解を目指す。

Ⅲクラス リレーの連絡順

	月	火	水	木	金	土
パート2	(清水)	前田 →	小林 →	小田 →	小林 →	清水 →
パート1	小田	前田	(英語)	小田 →	小林 →	松嶋 →
	小田	(大河原)	小林	(英語)	(大河原)	
		(大河原)		(週間試験)		

*進度の調整は、火曜と金曜3時限目(大河原)で行なう予定です。

Ⅲ. Ⅲクラス講師間の連絡について

今年度（平成17年度）も、学生の状況を把握し、具体的な授業内容や方法、またその進捗について、各担当の先生方と随時検討し、全ての担当講師が問題点や状況をできるだけ共有しながら進めていくこととしたいと思います。

《連絡の方法》

原則として毎週一回の予定です。しかし、各担当の先生方は集まれる日がないので、各先生方と嘱託講師とのその都度の打ち合わせと言う形としたいと思います。

《連絡の基本的な内容》

①学生について

個々の学生、クラス全体の進捗及び学習姿勢（雰囲気）などの評価・感想（週間試験の結果報告もむ）。

②授業について

①での学生の様子や状態を踏まえて、当面の進捗の見通し(いつごろまでにどの程度進める、あるいは進めたいなど)、及び授業の進め方や授業をする上での留意点などを。

③その他の問題

授業をしていたり、学生と接していたりして各先生方が気いたこと(学生、授業、教材や週間試験問題など何でも)。

《一週間の進捗予定と連絡について》

授業の準備の都合上、一応一週間の進捗予定表は作成します、学生の状況がわかりませんので、特に開始時は、必ずしも予定通りに進むとは限りません。ですので、前日に翌日の進捗をご連絡するようにしたいと思いますので、よろしくお願い致します。

《『授業日誌』(連絡帳)の記入について》

また、嘱託講師と各先生方だけでなく、それぞれの先生方同士でも、これまで主に「連絡帳」を通じて行なっていた進捗だけの連絡に加え、授業での具体的な内容や学生の状況についても連絡出来るように、これまでの「連絡帳」に代えて新しく「授業日誌」による先生方間の連絡を試みに行ないたいと思います。

記入事項は、これまでの「連絡帳」で行なっていた進捗に加え、

その日の授業(2コマ分)を振り返り、特に学生に関して、

① 授業においてパフォーマンスよく好印象を得た学生、

② また、逆に気になった学生、

それぞれの様子とその理由および考えられる改善策などを、基本的に一日2コマ分の授業についてをまとめて、お帰りになる前に再度思い返してみて、自分以外の担当教員に知らせるということで、記入してみてください。

〈資料1I〉

第2回 講師打ち合わせ (Iクラス)

これまでの前期の授業を行う中で、今年度のIクラス担当の嘱託講師として各担当の先生方にさまざまなお願いをしてきました。そこで、前期の授業を終えるに当たって、Iクラスコーディネーターとして、これまでにどのような点に注意を払い、その対応のためにどのようなことを考えてIクラスの授業運営に携わってきたのかをご理解していただきたいと考えています。また、それを踏まえ今後(後期)の授業の見通しについても述べたいと思います。

I. 3月の講師会での確認事項

1. はじめに

まず、今年3月の別科講師会のIクラス担当教員打ち合わせにおいて配布した資料の冒頭に書いた次の文章からはじめたいと思います。

今年もまた、新しい学生が来ます。別科としての目標は変わらなくても、学生の抱えている問題や状況は常に新しいものです。その意味で、我々教師も、自身のそれまでの経験は経験として、常に新しい気持ちで学生に臨みたいものです。

コミュニケーションは、時々キャッチボールにたとえられることがあります。そこで、学生は日本語というボールの投げ方や受け方を学習するのです。学生は自分が欲しいと思っているボールを正しく返してもらうために、どのように投げたらいいのか。その返って来たボールと欲しかったボールの違いによって学生は学んでいくものだと思います。我々教師は、ときには忠実な「壁」となってボールを返すことも必要だと思います。また、学生が自らボールを投げようとする仕掛けを用意することも我々教師の役割かもしれません。

これは、コーディネーターとしての私自身の日本語教育及び日本語を教える教師としてのあり方に対する考え方を表明したいと考えて載せたものです。これまでの経験や繰り返しに慣れてしまっていて、一人一人の学生の可能性と向き合うことを疎かにしないようにという私自身に対する戒めとしたいと考えています。

2. 別科全体としての方針

次に、別科全体における日本語教育の基本的な方針として次の3点が確認しておきたいと思います。これらは、3月の講師会においても確認されたものです。

- ①「初期の学生に対しては文法や文型を中心とした授業を行い、授業が進むにつれて、徐々に文法や文型から、内容を重視し、トピックを中心とした授業に移行していく。」

これは、比較的学習経験の浅い学習者を多く受け入れる本学別科において、初めの段

『別科日本語教育』第9号

階から、文章や談話を通して表現されている内容にアプローチするという方法ではなく、まずは一般に日本語教育で言われる「初級」において必要とされる文法項目と文型を、いわば基礎知識として学習した上で、その次の段階として、その基礎知識をさまざまな文章を通して運用する練習を繰り返すことで日本語能力を高めていくという方法論的前提を示したものです。

②「別科の日本語教育の基調として、いかに表現するかということよりも、「理解」に重点を置く。」

これは、1年間と言う限られた時間内において、別科に求められている（であろう）目標（つまり、学部における授業についていく）に少しでも近づけるように、現実の諸条件を踏まえて、別科での日本語教育の戦略的方針を示したものです。

つまり、日本語能力の限られた学生が別科修了後学部入学時に直面するであろう、日本語の問題を考慮に入れ、日本語能力全般にバランスよく教育を行うのではなく、むしろ教育の重点を「理解する」ことに大きくシフトすることにしたということです。

③「学習の焦点が、細部から全体へと広がるように授業を進める。」

これは、授業の学習活動において、学生の日本語運用に、細分化された一つ一つの言語的要素ばかりを強調するのではなく（もちろん基礎知識としては重要であるが）、常に一つ上位のレベルにおける文脈の中で意味を捉え、より「全体」的な内容として考えることを目指すという、さまざまな学習活動を授業において組織していく上での基準となりうる方針を示すことを意図したものです。

3. 目標と方法

上の別科全体の方針を踏まえた上で、今年度のIクラスの目標とその授業の進め方を、一年間の授業開始に当たって、3月の講師会において各担当教員と確認しました。まず一年間を通してのIクラスにおける目標としては次の2点を設定しました。

① 知識としては、いわゆる「初級」で取り上げられている文型（文法事項）と基本的な語彙を身につける。

② 技能としては、その時点で学生が持っている言語的な知識（文法・文型や語彙）を活用しながら、全体的な文脈の中で理解しようとする態度を身につける。

さらに、これらの目標を達成するための授業の進め方の、大きな方針として、次の2点を確認しました。

① 原則として、教科書で扱う内容の中でも、特に基礎的な文法事項や語彙は、違う教師によって、異なるタイミングで、さまざまな文脈の中で、何度も繰り返して螺旋状に扱っていくことにより、徐々にかつ確実に習得に結び付けていく。

② さまざまな教材・素材を通じて、またそれらを扱う授業の中で、意味を伝えるコミュニケーションを実践し、そこでの「意味がわかった」という経験を積み重ねていく。

II. 前期を振り返って

1. 授業開始当初の課題

(1) 日本語音声の認識

例年 I クラスは、本別科において最も下のクラスとして、これまでの日本語学習経験、或いは日本語との接触そのものが全くない学生が在籍することを前提として、授業がスタートします。

本年度も 2 名の未学習者 (トンガ人) が在籍し、加えて日本語との接触に限られる海外から来日したばかりの学生にとって、日本語の音声によるコミュニケーションは極めて困難なことです。このことは、特に来日当初の不安定な時期において、心理的な面にも影響することが考えられるため、日本語の音声、特に毎日接する担当教員の発する日本語音声に十分に慣れることは、授業を進めていく上での緊急の課題と言えます。

そうした事情を踏まえて、授業開始直後の一週間程度の期間を、その後の教科書への導入を念頭に、音声だけによる単純な自己紹介を中心とする内容の授業で、教員の日本語音声になれると同時に、教員との関係構築の第一歩の期間として設定しました。

(2) 文字の定着

I クラスには、授業開始時 4 名中 3 人の非漢字圏の学生が在籍していました。そのため、授業開始当初の I クラス全体としての優先的な課題のもう一つは、学生全員 (漢字圏の学生も含めて) が、文字、つまり「ひらがな」を覚えて、文字による理解、表現をできるだけ早く可能にすることでした。これは、その後のクラス授業において、文字による学習内容の提示や練習を可能にするためのものです。

文字の定着には、日本語の発話の連続した音声を一つ一つの「かな」に相当する音として聞き分けることが必要となります。さらに、一つ一つに区切られた音色の範囲を、特定の形の文字 (字形的イメージ) と一対一に対応付けなければなりません。それと同時に、その文字としての図形イメージをその他の別の文字と区別できるように、その形を覚えていく必要があります。言わば、ここでは、この二重の過程が同時に進行していることとなります。こうしたプロセスを、ひらがな五十音全てに行って、ひらがなが、とりあえず「読める」ようになるのです。

こうした、文字定着の過程を取り出して、それだけに専念する時間的余裕はないので、当初は、教科書「みんなの日本語 I」の進度を調整しながら、教科書を扱わない授業 (リレー以外の授業) において集中的に文字の導入、練習を行いました。しかし、文字が使用できないということは、それだけで教科書を進むリレーの授業においても、その方法に制約を受けることとなります。また、できるだけ早く文字を定着させるには、週 2～3 コマの授業だけでは限界があります。そのため、毎日行われる教科書の授業においても、10 程度の時間を文字の定着に費やすこととしました。

その結果、授業開始から一か月半程度で文字に集中的に特化した授業はとりあえず終了させることができました。

2. クラス全体の進め方

(1) リレー授業にけるパート I とパート II の考え方と実際

教科書の内容に沿って進んでいく、いわゆるリレー式の授業では、教科書の一課分

『別科日本語教育』第9号

を、その課の学習事項の導入とその練習の2つの部分に分け、それぞれを一コマで行うこととし、導入部分をパートⅠ、練習部分をパートⅡとしました。

① 「パートⅠ」(導入):

パートⅠでは、「新規」学習項目の導入と言うことで、先ず文字に頼らず口頭による日本語でのやりとりを通して、学習事項(文法、文型、語彙)を学生に提示し、その意味・用法などを理解させます。原則として翻訳語としての媒介語は用いません。これは、特に語学学習の初期(基礎習得期)において、日本語の言語形式と被表現事象とを、母語を介さず直接結び付けて理解するようになることを、ここでの日本語教育の目的の一つとしているからです。

また、進度では、学習項目の一課分の分量が教科書の各課に必ずしも均等に割り振ってあるわけではないが、進度の見通しを得るため、一課の導入(パートⅠ)を一日に1コマずつの2コマ(二日)で行なうこととしました。

② 「パートⅡ」(練習):

パートⅡは練習の時間としてあるが、クラス内における活動の種類としてはパートⅠの導入の時と基本的に同じです。ただ、扱う学習項目の理解度や運用能力がパートⅠよりも進んでいるはずなので、結果として学生の授業における活動のこなし方も向上しているはずで、文法として抽象的に理解していたり、限られた文例のみによって理解していたりしたのでは、より身についた理解には進みません。それは「導入」の段階です。そこからもう一歩進めて、より多様なコミュニケーション状況においてそれらを運用してみる経験を積むことで、それらを応用できる状況の可能性を増加させていくことが重要です。これが「練習」の目的です。尚、パートⅡにおける進度も、パートⅠ同様一日1コマの2コマで一課分を行なうこととしました。

③ リレー授業のパートⅠ、Ⅱにおける実際の授業:

実際の授業では、パートⅠでは、各担当の先生方のそれぞれの方法で、教科書や文字に頼らず口頭で導入のクラス活動を行なっていただきました。

一方、パートⅡでは、教科書の各課を構成している一部のセクションの内容を使いながら授業を進めることとしました。具体的には、パートⅡの1コマ目では、「練習B」セクションの挿絵を使って口頭による練習を中心に行なうこととしました。これは、各先生方の授業方法を活かすと同時に、共通の教材(教科書)を使うことで、学生にも教師にも一つの流れの中で授業が進んでいることを示すためであります。また、文字の練習も兼ねて、「文型」「例文」を読むことも途中から取り入れました。パートⅡの2コマ目では、「問題」セクションの音声テープによる問題の部分と「練習C」セクションのダイアログを用いた練習を行いました。

したがって、残りの「練習A」「練習B」「問題」の一部はこのリレー形式の授業では扱わず、教科書で用意されているセクションをこなすことよりも、できるだけ進度を進めることを優先しました。

(2) リレー以外の授業

上記のリレー形式以外の授業を週に7コマ設けて、復習や進度の調整などに当ててき

ました。

① 月曜1限、火曜3限（既習知識の再確認と文字の表記に慣れる）：

文字を介しての活動（読み書き）に制限があるため、リレー形式の授業では、教科書にある「問題」セクションは音声テープを使用する部分のみを行なっているが、文字の導入が徐々に進むにつれて、それ以外の箇所（書かれた文による練習問題形式の部分）を行なっています。

これは、少しずつ導入される文字とその表記になれること、それまで口頭を中心に行なわれてきた文法、文型項目の学習の復習を行ない、学習した知識の再確認を目的としています。

特に、月曜日1時限目には、「問題」セクションの中に付随している短い文章の簡単な読解問題にも触れながら、文字と文法、文型項目の復習を行なっています。

② 火曜4限（週間試験の実施）：

次項詳述。

③ 木曜2限、金曜1限（支援的授業）：

その時々々の学生の学習状況を確認すると同時に、随時必要と思われる課題に対する内容の授業を行い、リレー形式の授業等がスムーズに進めることができるように、その他の授業に対する支援的授業を行っています。

例えば、前述したように授業開始当初の優先課題が日本語音声の認識と文字定着にあった時期は、集中的にその2点に特化した授業を行いました。そして、各学生の学習状況を確認して、この授業において必ずしも十分な成果に至らなくても、その他の授業において補う程度に進歩していると判断できる場合は、新たな課題に対する内容に授業の方向転換を行っています。また、リレー形式の授業において諸々の理由（例えば学生の欠席など）により「導入」や「練習」が十分にできなかった場合などはその授業の内容を補う授業を行う場合もありました。

④ 木曜4限、金曜3限（週間試験の準備とフィードバック）：

次項詳述。

（3）週間試験の位置付け

週間試験の本来の目的は、学生の学習を学期の途中において定期的に試験を行うことで、学習の最終的な成果だけでなく、学習過程におけるその都度の達成もある程度、成績の評価の対象に加えると同時に、そのフィードバックによって、学習意欲の向上および持続を目的としています。

しかし、今学期のIクラスにおいては、以下の2つの理由により、後者の目的に大きく重点を置き、いわゆる成績評価を前提とした試験とはしませんでした。

① つまり、試験を行うには、学生の回答を引き出し、それを採点可能な形式にするために、どうしても表記を通じて行わなければなりません。それに、文字の定着が不十分な状態では、文字表記を通じて行う内容には限界があります。

② また、通常の授業においては、音声によるコミュニケーションを通じて授業が行われているため、文字表記によって学習した知識を再確認する作業ができないままで進

んでいます。

そのため、週間試験として、試験は実施するものの、そのための準備や練習、さらに試験実施後のフィードバックの3つのステップを一つの週間試験の過程と考えて実施しました。そうすることで、評価のための試験というよりも、「試験」という動機付けの下での既習知識の再確認および練習の一環として位置づけました。

(4) 「五つの波」

学習項目を一度しか授業で扱わないというのではなく、既習の知識でも何度も記憶を喚起させて定着をより確実なものにすることで、それらの使用へと結び付けていく必要があります。そのために、教科書にある学習項目から以下の五つのセクションを拾い出し、時間差をつけて暫時的に授業で扱うことで、一つの学習項目を何度も違った形式や文脈の中で学習できるように工夫しました。つまり、一度学習した事柄を、ちょうど五つの「波」が次々にやって来てくるように、学生が何度も学習し、その度に記憶が強化されていくようにしたのです。

その五つとは次の通りです。

第一波：パート1（導入）として行われる授業（教科書には特に触れない）

第二波：パート2（練習）として行われる口頭による練習、「練習C」、「問題」のテープ問題

第三波：リレー外の授業で行われる「問題」のテープ問題以外の問題

第四波：リレー外の授業で行われる「問題」の読解問題

第五波：週間試験（その準備とフィードバックを含む）

3. 学生の学習状況について

(1) 当初の想定

授業開始前、例年の経験より1クラスの学生を次のように想定していました。

まず、原則として全員がゼロスタートの学生で、日本語学習経験は極めて少なく、未知の日本語の言語環境（授業も含めて）にどのように対処していったらいいかということが最初の彼らの課題となる。そのためにも、少しずつでも日本語のコミュニケーションの経験を積み重ねていく必要がある。

(2) 学習状況の個人差(トンガ学生とその他の学生)

前期授業を通しての各学生の授業での学習はそれぞれに異なった過程を示しています。特に、トンガからの2名と他の3名との間では大きな違いが出ているように見られます。

つまり、授業において日本語を通じて行われる種々の学習の活動は、活動時に提示される話題的内容というよりも、そこで用いられる日本語の文法・句型なり語彙なりの使用といったメタ認知的な学習項目の提示を目的としていることが多いものです。しか

し、トンガの2名の学生には、活動の内容的な部分にばかり注意がいき、活動での設定された目標が達成されることには熱心になるものの、現在のところ、日本語運用のための基礎知識としての文法・文型の知識が蓄積され獲得されにくい傾向があるように見受けられます。

こうした違いは、各学生の個別の（特に授業外での）学習・生活環境なども影響していることが考えられますが、学生本人に由来する要因として、少なくとも次の三つを考えることができるのではないかと思います。

- ① 漢字圏か非漢字圏か
- ② 別科入学前の日本語学習経験の種類・程度
- ③ 日本語母語話者の教師による日本語での日本語授業に対する対処の仕方・方略スタイルの違い

4. 現在の課題

(1) 学生への対応上の課題

前項での学生の学習状況を踏まえて、授業における学生への対応において、トンガの2名と他の3名とを分けて考える必要があるだろうと考えています。

つまり、トンガの学生には、当面は授業における学習活動での課題達成に集中させて、日本語運用のための基礎知識の整理は、とりあえず後回しにしても止むを得ないのではないかと考えます。ただ、今後こうした状況が続くかどうかはわかりませんから、彼らの変化に注意しながら、他の学生も含めたクラス全体として対応できるかどうか随時検討していかなければならないとも考えています。そして、後回しにした場合でも、それまでの活動の経験が学習した基礎知識の整理に活用できる段階になってから徐々に基礎的なものから提示していくこともできると考えています。

一方、他の3名の学生には、常に当該活動で目的とされている学習事項を意識させながら、活動に参加させることで、より効率的な学習へと導いていければと思います。

(2) クラス全体の学習内容に関する課題

これまでは音声の認識と文字の定着が優先課題であったが、現在はそれらが一応ある程度の段階に達したと考えています。それを踏まえ、現段階における学習内容に関する課題としては、次の2点を考えています。

① 語彙力の補充：

これまでは、リレー授業の中心を教科書の進度を進めることにおいてきました。学習した内容が次第に積み重なっていく中で、進度をある一定のスピードで進めていくことは、その分学生への負担も大きくなると考えられます。そのため、前期のリレー授業では十分な語彙の補いよりも文法や文型を導入することを優先させてきました。

もちろん、リレー授業における進度の優先は後期になっても現在の教科書「みんなの日本語」が終了するまでは変更はありませんが、同教科書終了以前でもリレー以外の授業において、学生の負担の度合いを見ながら、少し進度を遡って基本的な語彙の練習および補いを徐々に進めていく必要があると考えています。

『別科日本語教育』第9号

語彙は、文法や文型と違い、表現される分野の内容に大きく依存しているものです。そのため、生活レベルで使用される基礎的なものを除けば、語彙そのものだけによって、その学習順序を予め設定するのは難しい面があります。その反面、語彙は学生の日本語表現や、特に理解の幅を広げる役割を持っています。理解が深まることは、特に初級者にとっては、コミュニケーションにおける心理的な安心感ももたらすため、その点からも重要だと考えています。

②漢字の学習：

非漢字圏の学生が半数以上（5名中3名）を占める今年度のIクラスにおいては、クラス全体としての漢字の手当てについても考えておかなければなりません。これまでの非漢字圏の別科修了生からも、学部に進学してからの漢字（の理解）の重要性は強調されています。その意味からも、何らかの一定の学習が必要であると考えています。

しかし、漢字は語彙としての側面と文字としての側面の両面を持っています。また、文字の形そのものがひらがな等に比べ複雑な上に数が多く、さらに一つの漢字に対する読み方も複数存在します。こうした漢字の性質と学生の基礎的な日本語能力の伸びを考慮して、授業における漢字学習の目標をどのように設定し、どのタイミングで開始し、どういった授業方法および教材を用いて進めていったらいいかを、考えておかなければなりません。その点については、現在検討中です。

5. 連絡帳（授業日誌）の記入について

各担当の先生方には、授業後に行った授業について連絡帳に記入をお願いしています。これまでは、単に、進度（授業で扱った課およびセクション、問題番号など）を記入していただいていたのですが、今年度（実際には昨年度の3クラス（大河原担当））から「連絡帳」ではなく「授業日誌」として記入していただいています。

この目的の一つは、1クラス担当教員間の連絡を教科書の進度だけでなく、授業で行なったことの内容、さらにその授業での各学生の学習状況（授業パフォーマンスや態度など）も他の先生方にお伝えすることで、各先生方の各学生に対する認識や評価をより複眼的なものとしていただくための一つの方法としていただくことです。

もう一つの目的は、それを書かかれる先生ご自身が、自分の授業を振り返り、学生の反応と同時にご自身の授業のやり方や学生への対応の仕方を反省していただくための機会にさせていただきたいと考えています。

具体的な記入事項および方法は、これまでの「連絡帳」で行なっていた進度や授業内容に加えて、その日の授業（2コマあるいは1コマ分）を振り返り、特に学生に関して、授業においてパフォーマンスよく好印象を得た学生、また、逆に気になった学生の、それぞれの様子とその理由および考えられる改善策などを、基本的に一日2コマ（あるいは1コマ）分の授業についてまとめて、お帰りになる前に再度思い返してみ、自分以外の担当教員に知らせるということで、記入していただきたいと思っています。

こうした試みの実際の効果・成果あるいは欠点などは、まだはつきりわかっていませんが、特に不都合がない限りが、今後ともつづけていきたいと考えています。ぜひご協力をお願いします。

Ⅲ. 今後(後期授業)の見通し

後期終了までの目標は、現在のところ明確に設定しにくいのが現状です。というのも、今後（特に夏休み明け以降）の学生の変化の予想が例年つかず、安易な想定を許さない状況にあるからです。それでも、現在の段階で考えられることだけを述べておきます。

1. 「みんなの日本語」終了までの方針

現段階で考えていることは、先ずできるだけ早く初級教科書「みんなの日本語」の学習を終えることです。

基本的な進め方は、前期と同様です。

また、教科書「みんなの日本語」の終了といっても、先に述べたように教科書の内容をいくつかに分けて時間差をつけて授業で扱っています。そのため、最後の「波」が最終課に到達するには、後期末までかかってしまうだろうと考えています。

2. それ以降の授業の方針

「みんなの日本語」の終了後は、教科書で学習した「はず」の文法・文型の基礎知識を徐々に、長くまとまった内容のある文章や談話において活用し、理解・表現できるように結び付けていくことが重要だと考えています。特に初めに述べましたように、理解に重点を置いた授業を考えています。

また、学生の構成が、非漢字圏が多いこと、これまで音声による授業が中心であったことを考えて、書かれた文章から理解を得ることを中心において後期の授業を考えて行きたいと思っています。

〈資料1J〉

平成19年度 別科日本語授業について

I. 午前の授業について

【全体で一つのクラスとして】

午前の授業では、学生は三クラスに分けても、各クラスにクラス担当の嘱託講師は置かず、三つのクラスを別科全体で一つのクラスとして捉え、責任嘱託講師が中心になって嘱託講師がすべてのクラスの進度や教材などの授業内容及びクラス編成について決定し授業運営に当たる。

これは、授業内容や授業での学生対応において、クラスによる差を極力減らし、全クラス共通の内容で授業を進めていくこととする。

【クラス間の学生移動】

授業内容を共通化することで、一年を通してのクラス間の学生移動は、当該学生にとって必要と判断された場合は、いつでも行うことができるようにする。このことで、各学生の学習状況に対して、一定程度柔軟に対応可能になると同時に、学生の学習意欲の向上も期待できる。

【授業内容】

授業内容は、従来通り「みんなの日本語」を主教材とし、各課をパート1（導入）とパート2（練習）の二つに分けて、1時限目に前日の導入を受けてパート2（練習）、2時限目に新しい学習項目の導入としてパート1を行う。原則として、1時限目にパート2、2時限目にパート1といった授業形式は変更しないこととする。ただし、進行状況等によって、調整が必要な場合は嘱託講師が判断し適切な措置を講ずることとする。

【基礎的知識としての「みんなの日本語」】

「みんなの日本語」で扱う学習項目は、今後学生の日本語運用に当たっての基礎的な知識として捉え、同じ項目であっても、繰り返し授業において学習できるように授業を組織していく。

また、基礎的な知識の習得を目指す意味で、授業では辞書は使用させず、日本人の教師の日本語による授業において、スムーズな日本語使用ができるようにしていく。

【「みんなの日本語」以後】

「みんなの日本語」終了後は、語彙力の増強及びそれに伴う読解力の向上を目標の中心において、できるだけ多くの文章に触れるようにしていく。しかし、具体的な教材や授業内容及び方法は、後日学生の学習状況等を見て決定する

こととする。

II. 午後の授業について

【各学生に自分の目標を持たせる】

午後の授業では、学生各自が自分の目標や目的意識を持って授業に参加するようにする。したがって、クラスとして授業はしていても、そこでの目標は学生ひとりひとりが自分の目標を持っているようにする。しかし、実際の授業においては、一斉に同一の教材を読んだり聞いたりすることもあり得るだろうし、各自が目標を持っているということが個別の材料を提供することには必ずしもならないだろう。

ここでは、各自は自分の目標に向かって主体的に学習を進めていくために、午前の授業においては使用しなかった辞書の活用も促したい。

【前期の二つの目標】

学生一人一人が自分の目標を設定するために、授業として次の二つの課題を前期の総まとめとして設定することにする。

(1) 前期終了時に別科長による進路に関する面接(15分～30分程度)を行う。そこでは、これまで及び現在にいたる自分自身について話すと同時に、今後の自分の希望や目標などについても日本語で説明することとする。

(2) 前期終了時の第2回進路希望調査提出の際に、日本語による希望理由書(400～800字程度)を付けて提出することとする。その際にも、(1)で話したような現在までの自分を振り返って、その希望にいたった理由を、希望する内容とあわせて説明することとする。

【クラス分けについて】

クラス分けについては、学生の日本語能力(午前の進度や漢字・非漢字圏の別など)に加えて、クラスでの活動に対する積極性や課題に対する取り組みの慎重さといった学習における各学生のスタイル、さらにはクラス全体の活動における進めやすさやクラスのダイナミズムなども考慮して、適切な学生配置にする。

【各授業における授業計画作成】

各授業の担当教員は、半期分の授業計画(授業全体の目標、授業内容、授業活動、教材など)を責任嘱託講師から提示された目標をもとに作成し、来年度開始前(3月末)までに提出することとする。

提出された計画は、責任嘱託講師がその内容を確認した上で、決定される。

また、計画作成及びその実施に当たっては、同一科目を担当する教員が互いに協力し意見交換をしながら行うことが望まれる。

《各科目の授業目標及び形態について》

《日本語演習13(月曜日3時限目)》

『別科日本語教育』第9号

先の目標（1）を授業での前期の目標として、自分自身について口頭で表現できるようにする。

授業では、自己紹介において取り上げられるようなテーマ（例えば、国での生活、故郷について、家族、子供時代、日本で気づいたこと、趣味や特技、将来の夢など）を設定してそれらについて口頭で発表するといったような活動を行う。

さらに、ここで発表した内容をまとめた形で面接での発表につながるように指導したい。

特に重要なことは、各自が目標を持っているといっても、他の学生の発表を聞くことで、自分の発表を振り返ることができるような機会を授業の中に設けることである。

〈日本語演習14（火曜日3時限目）、日本事情（木曜日4時限目）〉

先の目標（2）を授業での前期の目標として、自分自身について日本語で書いて表現できるようにする。

授業では、学生自身のこれまでを振り返り今後の目標を明確にし、それを自分なりの表現で表すことができるように、各学生の日本語知識の向上に合わせて、テーマを設定し、それについて、文章完成の過程におけるさまざまなステップを踏みながら最後に短い文章を完成させること。

さらに、ここで完成させた文章の全てあるいはいくつかの全部あるいは一部を組み立て、再度構成して、最終的に理由書作成につながるように指導する。そのことで、まとまりのある長めの文章を書く際のアプローチの方法を経験させる。

〈日本語演習15（水曜日3、4時限目）〉

コンピュータ教室を使用し、コンピュータの使用、特に日本語入力の作業を行うことをある程度前提にした活動を行うことで、コンピュータの操作に慣れると同時に、日本語の図書などの膨大な量の日本語に対するアプローチの方法や心理的態度を身に付けることができるようにする。

授業では、日本語入力の基本的な練習に加えて、各学生が関心のある分野の文章を自ら選び、それをそのまま入力したり、要点だけをまとめて入力したりするといった活動も考えられる。日本語入力では、ローマ字だけではなく漢字の読みの練習にもなる他、語彙や文法などの確認しどうも行うことができるだろう。

〈日本語演習16（金曜日3時限目）〉

午前の授業での復習及び進度調整の時間として、「みんなの日本語」で扱う文法や文型の整理や語彙の確認を行う。

また、週間試験のフォローアップもここで行う。

〈ホーム・ルーム（火曜日4時限目）〉

ホーム・ルームの時間は、事務的な連絡事項等に当てられる。

特に事務的な連絡事項等がないほとんどの時間は、週間試験を行うこととする。週間試験は、午前の授業の進度によって各学生が異なる問題を行うこととなる。また、一定の点数に達しなかった場合は、再度同じ試験を行うこととする。

具体的な試験問題の作成・決定及び採点は責任嘱託講師を中心として嘱託講師で行うこととする。

また、ホーム・ルームで行われる内容は、その計画を事前に別科会議に示し、承認させること。

《授業開始時の措置》

前期授業開始時には、まず文字の確認を行い、ある程度文字によるコミュニケーションができるようにしておく必要がある。つまり、形を音と結びつけて認識できることと音から形が再生できるようにする。

文字の確認が必要だと判断された場合は、午前及び午後の授業において、部分的に文字確認の作業を行う。授業における具体的な方法については、クラス分けテスト時の学生の状況を判断してから決定したい。

《学習成果の管理保管》

別科の授業体制等の評価の一環として、各学生のファイルを設け、各学生の日本語学習に関する資料や提出物など保管管理する。

(資料 1K)

平成19年度後期 別科日本語授業について

I. 授業全体の方針として

【学生個々の能力を伸ばす】

今年度は学生が4名ということもあり、午前・午後を通した授業においても、クラスとして授業はしていても、基本的に学生一人一人の能力をそれぞれに伸ばしていくことを基本的な方針としたい。

II. 午前の授業について

【学生個々の進度に合わせたクラスとする】

午前は一つのクラスとなっているため、レベル差のある学生が同時に授業を受けることになる。そこで、午前の授業においては個々の学生の目標、レベル、学習のペースにあわせた活動を中心とした授業としたい。(前期は、午後のクラスでこうした方式の授業を行っていたが、当初の計画では、午前が3クラス体制だったために、より細かなレベル差に対応しにくい午後の2クラス体制において行うことが、その主旨であった。)

尚、学生が個々に行う活動が中心となるため教員の対応も個別になってしまうが、その一方で、クラスとしての授業でもあるので、他の学生がどんな目標でどんな活動をしているのかを互いに知ることができる工夫もしたい。

【後期の目標として】

後期は、前期のように学期の最後に一つ具体的な目標を設定することが難しい。そのため、別科での一年間の勉強の成果として、次の二つの目標を目指すこととした。

- (1) より正確な日本語表現ができるようになる。
- (2) より幅広い分野の日本語が理解できるようになる。

これらの目標は、後期の午前の授業を通じて設定されるいくつかの中間的な課題や、12月予定されている発表会、別科作文集、さらには学期末の試験によって、具体的な形として現れるようにしたい。

【授業内容】

上記の二つの目標をもとにして、1時限目の授業では上記の(1)を中心的な目的にした活動、2時限目は反対に(2)を中心的な目的とした活動を行う。原則として、1時限目と2時限目の授業における内容的なつながりは必ずしも前提としない。

また、1、2時限目ともひとつのシリーズ化された教材(教科書のようなもの)を中心に授業を進めることとし、そのことで、担当教員間の連絡を行いやすくすると同時に学生にとっても自分の勉強の進捗を自分で確認しやすいようにする。

さらに、定期的にそれぞれ中間的な目標となるような課題を設定し、それに向けて授業を行うこととしたい。

【初級文法の復習から正確な表現へ】（1時限目）

後期が始まってすぐの時期は、夏休み明けということもあるので、前期に学習した初級文法のまとめと復習から始めたい。

その後は、初級から中級レベルの教材を用い、文章の読解を通して、そこで使われている文法や表現の意味や用法使を学び、それらを、最初に読んだ文章のトピックなどの内容に沿った短い文章を作文する。

基本的にわからない語彙で読解の文章が読めないということのないレベルの文章、あるいは予め語彙の手当てをしてから読解に入るようにしたい。

【語彙力の伸長から幅広い理解力へ】（2時限目）

読解用の教材を使用し、4回程度に1回、教材にバリエーションを持たせると同時に、応用力を養うことをねらって、使用している読解教材とは全く別の読解あるいは語彙の練習問題を行う。

また、使用している読解教材においてわからない言葉や初めて知った語彙や表現などは、一つの読解練習が終わった後、手書きの語彙リストとしてまとめて提出させる。その際に、学生によっては、新出の漢字もその語彙リストに含めることとしたい。

さらに、ときどき各自が読み終わった読解の文章の内容についてクラスの中で発表させることで、他の学生の読んでいる文章あるいは自分が一人で読んだ文章について少し話し合いを持つことができ、クラス活動にもバリエーションが生まれる。

Ⅲ. 午後の授業について**【総合的運用能力と他者から学ぶ】**

午前の授業では、学生各自がそれぞれのペースに合わせて個別に学習することが中心であったが、午後の授業では、クラスとしての活動を中心として、他の学生と協力して課題を遂行したり、理解を深めたりする活動を考えたい。

日本語能力の面でいえば、午前の授業においては、個々の学生が自分なりの語彙や表現・文法といった日本語運用の資源を蓄積し、それらを午後の授業では他者との関わりの中で理解と表現のバランスを考慮し、総合的に活用する機会としたい。

【学生のクラス分けについて】

前期の各学生の学習状況を踏まえて、クラス分けに際してはレベル別ではなく、学習スタイルを中心に学生の組み合わせを、下のよう決定した。これは、互いに学習スタイルの近い同士でクラス分けすることで、授業において、より活発且つより有効な学習が起きることを意図した。

Iクラス：全益賢、于子良

IIクラス：許丹楓、何偉宙

【午後の授業体制について】

『別科日本語教育』第9号

前期の学習状況及び後期の目標を踏まえて、午後の授業体制を以下のようにしたい。

(◎は各科目のリーダー。)

月曜日 3 時限目	合同クラス「日本語演習 1 3」:	◎大河原
火曜日 3 時限目	I クラス 「日本事情」 :	◎前田
	II クラス 「日本語演習 1 4」:	◎松嶋
水曜日 4 時限目	I クラス 「日本語演習 1 5」:	松嶋
	II クラス 「日本語演習 1 5」:	◎清水
木曜日 4 時限目	I クラス 「日本語演習 1 4」:	大河原
	II クラス 「日本事情」 :	増山
金曜日 3 時限目	I クラス 「日本語演習 1 6」:	◎清水
	II クラス 「日本語演習 1 6」:	松嶋

【各科目における授業計画作成】

前期同様、各科目におけるリーダーはもう一人の授業担当教員と協議の上、半期分の授業計画（授業全体の目標、授業内容、授業活動、教材など）を責任嘱託講師から提示された目標をもとに作成し、前期開始前（9月20日）までに提出することとする。

提出された計画は、責任嘱託講師がその内容を確認した上で、決定される。

また、計画実施に当たっては、作成時と同様に、同一科目を担当する教員が互いに協力し意見交換をしながら行うことが望まれる。

《各科目の授業目標及び形態について》

〈日本語演習 1 3（月曜日 3 時限目）〉

まず前半と後半に分け、前半は毎回、図書館やインターネットを使用して情報を集める、簡単な課題を設定し提出させる。

後半は、別科作文集の編集（レポート、先生方へのインタビューなど、学内施設（図書館など）案内など、各学科の課題、別科生から見た日本人学生）を一つの授業での目標として、最終的に自分たちの作文集を作成する。

〈日本語演習 1 4（火曜日 3 時限目、木曜日 4 時限目）〉

ビデオを材料として、それを視聴することからはじめ、ビデオ内容の理解、さらにそこから自分の問題意識や視点をひろげて、クラスでの話し合い、最後にそれらの結果をまとめるといった、総合的な活動をめざしたい。

その過程で、内容確認などのために何度もビデオを視聴することで、語彙や文法などの復習にもつなげたい。

* 〈日本語演習 1 5（水曜日 3 時限目）、日本語演習 1 6（金曜日 3 時限目）〉

コンピュータ教室を使用し、コンピュータの使用、特に日本語入力の作業を行うことをある程度前提にした活動を行うことで、コンピュータの操作に慣れると同時に、日本語の図書などの膨大な量の日本語に対するアプローチの方法や心理的態度を身に付ける

ことができるようにする。

授業では、日本語入力のための基本的な練習に加えて、各学生が関心のある分野の文章を自ら選び、それをそのまま入力したり、要点だけをまとめて入力したりするといった活動も考えられる。日本語入力では、ローマ字だけではなく漢字の読みの練習にもなる他、語彙や文法などの確認しどうも行うことができるだろう。

* 〈日本事情（火曜日 3 時限目、木曜日 4 時限目）〉

午前の授業での復習及び進度調整の時間として、「みんなの日本語」で扱う文法や文型の整理や語彙の確認を行う。

また、週間試験のフォローアップもここで行う。

〈ホーム・ルーム／週間試験（火曜日 4 時限目）〉

ホーム・ルームの時間は、事務的な連絡事項等に当てられる。

特に事務的な連絡事項等がないほとんどの時間は、週間試験を行うこととする。週間試験は、午前の授業の学習を反映した内容とし、各自の進度によって各学生が異なる問題を行うこととする。（したがって、午後の授業に関しては、それぞれの授業において評価を行うことになる。）具体的な試験問題の作成・決定及び採点は責任嘱託講師を中心として嘱託講師で行うこととする。

また、ホーム・ルームで行われる内容は、その計画を事前に別科会議に示し、承認させること。

IV. その他

【電子辞書の使用に関して】

前期授業において授業中の電子辞書の使用が目立った。

電子辞書の使用そのものは日本語学習においても有益なものであるが、あまりにもその便利さに依存してしまうと、電子辞書がないと日本語が正確に使えなかったり、文脈にそぐわない語彙等の使用をそのまま覚えてしまったりするなど、マイナス面も考えられる。

そのため、電子辞書の授業での使用を何らかの形で制限する時間があってもいいと考えている。

そこで、学生の授業での実際の様子などを見て、後期以降、必要性が出てくれば別科全体として何らかの方針を考えたい。

【学習成果の管理保管】

前期同様、別科の授業体制等の評価の一環として、各学生のファイルを設け、各学生の日本語学習に関する資料や提出物など保管管理する。

〈資料 2A〉

短期交換留学生に対する日本語教育についての問題点と今後の方向性

本学では毎年、海外の協定校より十数名の短期交換留学生（以下、留学生）を受け入れている。これらの留学生は本学の各学部及び大学院において勉強することを前提として来校していた。ところが、ここ2、3年、大学の授業を受講するのに十分な日本語能力を伴わない者が目立って多くなって来ている。そのため、現在のところ応急処置的に日本語トレーニングコース（以下、日本語コース）を設けて対応しているが、それも、大きな問題点を含んでいる。以下、その留学生に対する日本語教育についての現状と主要な問題点、さらにそれらの対策の可能性について報告する。

1. 留学生の多様性とその受け入れ

ここ数年の留学生の事例を見てみると、留学の目的という点から2種類の留学生が来校している。一つは、日本語の学習を主目的としている者（日本語が専門の者も含めて）。もう一つは、日本語学習もさることながら、日本語以外の自分の専門の勉強を主目的としている者である。後者の場合、本人の日本語能力の如何にかかわらず、当然日本語学習に制約を受けることになる。それに加えて、日本語能力の点から見ても、上の2タイプの学生それぞれに能力の差、さらに、一留学生の中でも技能による能力の差が見られる。そこで、先に述べたとおり、留学生は学部及び大学院での勉強を前提としているところから、その能力に満たない者を対象に日本語コースを設けている。

留学生の「交換留学生」という性格上、学部、大学院、日本語コースでの勉強の他に、彼らの受け入れについて、国際交流という観点から、何らかの対応が必要なのではないだろうか。たとえば、日本の文化的、社会的活動への参加、見学や日本人（学生）との接触の機会を積極的に設けるなどが考えられる。もし、そうした活動が行われるようになれば、日本語教育という点からも、それらを大いに利用し、バラエティーに富んだ教育内容を提供する契機とすることもできる。

2 日本語コースの位置付け

先ほど述べた通り、日本語コースの目的は学部での授業に参加できない留学生に日本語の授業を提供することである。したがって、本コースのレベルも初級に限定される。ところが問題は、学部授業との関係である。仮に本コースの日本語授業が、学部での授業と同等なものであれば、本来学部生を対象とする講義の内容は各学部のカリキュラムに則って決まるのに対し、本コースでも留学生を対象とした授業内容の基となる何らかの方針なり規準なりが必要である。もしそうでなければ、どのようにして、授業内容を特定し、コースの目標を立てていけばよいのか。また事務的な問題も生じて来る。学部での授業の場合は、事前に履修登録を行わなければならない、その登録内容に従い評価、単位の認定が行われている。授業への出席が悪い場合は、それが評価にも反映されるため、授業への出席という点からもある程度の拘束力がある。そうした拘束力は本

コースの場合にはどのような形で存在するのか、またはないのか。

3. 日本語コースの役割

現在行われている日本語コースにおいては、結果として、次の三つの役割を担っている。

まず第一は、大学院や学部での勉強をしながら部分的又は全般的な日本語能力の向上が必要な留学生に対し、日本語教育上のサポートをすることである。彼らの留学の主目的は、大学院や学部での専門の勉強であるため、日本語学習は二次的なものとなり、かなり個別な対応が必要な場合や、本人の希望にもかかわらず十分に日本語学習の機会が得られない場合も出てくる。

第二は、ある程度の日本語力を有して来日しても、本来の学部での勉強のためには日本語能力が足りない留学生に対し、留学の前半で日本語能力を伸ばし、後半には学部での学習(一般留学生科目も含む)をある程度可能にすることである。このような場合、本コースの位置付けとも関連するが、前半の日本語の勉強を正式な単位又は学習の評価として扱うかどうかが問題となる。

第三は、日本語能力が低いために留學生活のほとんどをこの日本語コースだけで終える留学生に対する日本語教育である。この場合、学習の評価の問題は更に大きくなる。そればかりではなく、日本語コースの教育内容も一年間の留学の成果となり得るものにしなければならない。では、何を具体的に教えるのか。それは一年間の留學生活で留学生たちにどんな教育効果を期待するかといった受入大学側の基本方針にかかわる問題である。実際には、この第三の場合に含まれる留学生が大半を占めているのが現状である。

4. 日本語コースの問題点

以上のことを踏まえると、大きく二つの点を根本的問題として整理することができる。一つは、日本語コースにおいて留学生に対し具体的に何を教育すべきか、ということである。これは、留学生を受け入れた本学が、彼らの実際の姿を踏まえ、どのような教育を行おうとしているかという問題にかかわることである。もう一つは、学部での授業との関係で、本コースを事務的、組織的にどう位置付けるかという問題である。特に単位の問題、出席の問題は緊急な解決を要する問題である。

さらに、もう一つ具体的な運営上の問題として触れておかなければならないのは、一年間という限られた留學期間を有効に活用するために、夏季及び春季の長期休暇をいかに利用するか、またはしないかという問題である。仮にこうした休暇の時期を利用できるとすれば、さまざまな可能性が考えられる。たとえば、日本語の補習コースを開設すれば、普段専門の勉強に忙しい留学生は、日本語学習だけに集中できるし、またその他の留学生にとってもよい復習の機会になるであろう。また、来日したばかりの学生のために日本での生活のためのオリエンテーションを目的とした何らかの1、2週間程度の特別な日本語コースがあってもよい。そうすれば、本来の日本語コースのカリキュラムや時間割作りの準備として利用することもできる。

5. 今後の日本語コースの可能性

こうした留学生の現状と日本語コースにおける問題点を踏まえると、今後活発化が予想される短期交換留学生の受け入れについて、本学として、何らかの基本方針とその体制作りが急がなければならないことは明らかである。そうした体制の中の一つとして、この日本語コースを位置付け、特に学部での勉強には参加できず、日本語コースだけで留学生活を終えてしまうような留学生に対する教育をどのようにしていくかを明確にしておく必要があるであろう。

〈資料 2B〉

短期交換留学生に対する日本語トレーニングコースに関する
問題点と今後について

I コースの現状とこれまでの経過

①設置時の目的

- ・大学の学部での講義受講を前提としていた短期交換留学生の中に、それに足る日本語能力のない学生が来ために、そういった日本語力の低い学生を対象とするコースとして始まった。

②その後の対応

- ・コース開始の二、三年後、別科嘱託講師がコースのコーディネートを担当してからは、主に対象学生のコースに対する希望・要望と各先生方との調整を行い模索を続けてきた。

③現状（三つの機能と時間的制約）

- ・これまでの経験から結果的に次の三つの機能を果たしてきた。
 - a. 大学院や学部での勉強の一方で、部分的または全般的な日本語力の向上を求めている学生に対し、日本語教育上のサポートをする。
 - b. 留学期間中（特に後半）学部授業への参加を目標に日本語力の向上を図る。
 - c. 留学生活（1年間）のほとんどをコースで送る学生に対する日本語教育。
- ・半期毎1年間という時間では、上のbに含まれる学生は限られてくる。またcの学生も、はっきりとした目標の下に教育が行われなければ、1年間と言う時間も中途半端に終わってしまう可能性がある。

II コース運営上の実際的な問題点

① コースの目標の明確化（授業方針の不徹底）

- ・コースの授業及び教育活動を通してを学習・到達する目標が設定されていない。そのため個々の授業間の連携も効率的に行われなない。また、評価についても、各授業での評価はできても、コース全体における評価はできない。

② コースの開始・終了時及び休講に関する取り決め

- ・各学期において、コース授業の開始日が一定していないし、それに関する規定もない。これまでは、授業内容の決定や学生の事情を考慮し、その都度決定してきた。
- ・学部の授業と平行してコースを受講する学生の場合は、本コースが学生の要望等に合わせているにもかかわらず、学部授業が優先されるため、学部での履修登録が終了しないと、コースの内容スケジュールを最終的に決定することができない。学生の学部及びコースの受講に際して、何らかの制限が必要ではないか。
- ・コースの終了も、学部に合わせたり、別科に合わせたりして一定していない。また、早く帰国する学生や帰国前に旅行したいと言う学生などは、早めに終了する

ことも認めている。

- ・先生方の都合で休講した場合は、その分の補講は一切していない。
- ③ 出欠席に関する規定（欠席の際の教員への報酬の問題）
 - ・各授業での学生の出欠席は記録しているが、予め学生のほうから欠席を申し出て来た場合は、一応理由は聞くものの、それを認めている。また、それによって、クラスの全学生が欠席となってしまう場合でも、教師への報酬は支払われる。
 - ・ただ、欠席の申し出がある程度前もって（例えば1週間前に）なされた結果、クラス全員が欠席となってしまった場合、先生方に休講にさせていただくようお願いしている。ところが、いつまでに申し出があればそうするかと言った規準は全くない。
- ④ 他科目（学部）との競合
 - ・本コースは、日本語能力の低い学生に対する特別措置として行っているのので、原則として学部授業への参加を優先させている。そのため本コースと学部授業を平行して取ることはあり得ないのだが、例えば日本語を必要としない語学の授業とは競合することが出てきてしまう。そうすると、学部授業が優先されてしまうためにコース全体としての教育にも不都合が出てきてしまう。
- ⑤ 総授業数の設定
 - ・本コースの総授業数は、予め決められているのではなく、担当をお願いしている教員の都合のつくときに授業を設定している。まず先生方の都合があって、それを基に授業内容を割り振っていくことになる。そのため複数のクラスを編成すると、十分な時間数が確保できなかつたり、授業が特定の曜日に偏ってしまったりすることも起こり得る。したがって、授業内容ではなく、先生方の都合によって決められた総時間数が優先してしまう。

Ⅲ根本的な問題点の所在

①コースの位置付け・優先順位（交流学生教育における）の明確化

- ・上で述べたような問題は、本コースそのものの短期交流学生に対する対応の中における位置付けが曖昧なためである。日本語能力の低い学生に対するコースということだが、その日本語能力の低い学生に対しどのような日本語能力を身につけさせるのかが全く明確になっていない。コースを担当する者が、状況的な制約から判断せざるを得ない。本学としては交換留学生にどんな学習成果を期待しているのか。交換留学生として、外国人学生が本学に来ることの意味をどう考えているのか、またはそれほど必要性のないものなのか。

②短期交流学生はどのように「特別」か

- ・日本語コースにおいてどんな目標を設定したらよいかを考える時、考えるのは、たとえ日本語能力が低くても日本という異文化の中で体験を通して、実りある留学生を送ってもらいたいということだ。そこで、日本語が上手ではなくても、その人なりに日本や本学で学生生活を体験することはできる。そうした体験や経験から学んだり考えたりすることに重点を置いたコース目標を中心に据えるとが

できるのではないか。

- ・ところが、こうした目標設定は、何も短期交換留学生の日本語能力の低い学生だけに必要だということではない。日本語力が高ければ高いなりに異文化から学ぶことはあるはずである。そうすると、日本語能力が低い学生だけにコースを限定する理由はなくなってしまう。最も、能力差を無視して一つのクラスで十分と言うのではない。むしろ能力差については十分に考慮した対応が求められるべきだと考える。
- ・さらに言えば、このことは、留学生全体にとっても言えることではないか。交換留学生も交換協定によって授業料が免除されている点を除けば、本学の学生という点では、一般留学生と変わらないはずである。確かに、一般留学生には四年間という時間がある。しかし、だからといって、交換留学生だけが「特別」ということになるのだろうか。いずれにしろ、そうした点も明確にしておく必要があるのではないか。

IV今後の方向性に関する提案とその可能性

①コースとしての自立性（基本方針）

- ・コースが学部授業の補足的なもの、あるいは学部授業に出られない学生の授業と言った消極的なコースではなく、独自の目標に向かって教育活動を行えるようになることが望ましい。
- ・その上で、このコースでの授業が学部授業と同様に、交換留学生の選択肢の一つになることができないだろうか。つまり、日本語能力が高い交換留学生も排除しないようなコースのあり方。

②交流活動の促進

- ・日本語能力を高めると言うより、日本人学生や日本人社会に触れ、その活動に参加するなどの交流的な内容を中心に据え、それを補うというよりは、より交流を深められるための方法として日本語の教育を考える。
- ・具体的な方策の一例としては、「具体的方策についての提案」。

③コースの可能性（対象の拡大）

- ・上の②で述べたように、教育目標の中心を日本語そのものから日本社会との交流へと移行させれば、日本語能力の低い者に限定するの必然性はなくなる。もちろん低い者を十分に考慮した内容や方法は必要だが、興味ある者に対しては原則としてオープンにすることもできる。
- ・さらに言えば、一般留学生や日本人学生の参加も可能なコースの内容を考えてもいいのではないか。コースの一部として、対象を限定して交換留学生だけとすることも必要な場合が出てくる可能性もあるが、コース全体として見た時には、基本的にいろいろな人と共に学んだり、考え方やものの見方を交換したりできる機会を設けることが、コースとして重要なことではないか。

ここでは、一切触れなかったが、上の方向性を具体的に進め、機能させていくために

『別科日本語教育』第9号

は、中心となって主体的に一つ一つの作業を行っていくスタッフが必要であることも付け加えておきたい。

最後に、IVで述べたことは、問題解決に当たっての一つの方向性の提案であって、可能性である。したがって、今すぐそうしなければならないということではないし、もちろん、そもそもそうした方向へ進まなければならないということでもない。

ここで、重要なことは現在生じてきている問題の把握とその解決である。その問題解決に当たっては、十分に議論、検討を重ねる必要があることは言うまでもないが、これまでの経緯及び経験の中で得てきたものを生かして安易な解決に流れることのないように希望する。

「具体的方策についての提案」

I. 交流活動について

① 留学生会館の活用。

例えば、日本人学生や一般留学生にも一部開放して、さまざまなタイプの学生が行動して生活できる空間とする。また、一階の談話室を利用して学内外の団体との交流を図る（交換学生がお世話になった団体を逆に招待するなど）。

② 短期ホームステイ。

夏休みや、春休みなどの長期休暇を利用して行える大東独自のホームステイ交流ネットワークを形成しておく。父兄会または同窓会などの協力を得て、できるだけ地方での滞在ができるように、受け入れ希望者を募っておく。

ホームステイの受け入れの際には、受け入れ家庭の経済的な負担にならぬように、今ホームステイの趣旨を説明しておく。できれば、受け入れ家庭および交換留学生の両方から報告なり、コメントなりが大学のほうに届くようにすれば、今後の改善に役立つ。

③ 大学行事や地域の行事への参加。

フレッシュマンスポーツデーやラグビー応援などの大学行事や地域の行事のうちいくつかに絞って、できるだけ交換学生全員で参加するようにする。

④ 日本文化に触れる。

日本語学科の「日本語文化総合演習」参加できるようにする。また、書道研究所の協力が得られれば、外国人向けの書道の授業（日本人学生の協力があってもいい）も可能ではないだろうか。

その他、日本の伝統文化（お茶、お花、邦楽など）に親しむ機会を設けることも考えられる。

II. 日本語授業について

① 留学成果の発表会。

交流学生について、留学終了時に一年間の留学の成果を発表する場を設ける。ここでの発表は口頭で行うこととし、原則として日本語で行い、観客には日本人学生

をはじめ所属学部の留学生担当者も招待する。

この発表に合わせて、日本語の授業では、普段の留学生活や、日本社会での生活で気づいたことなどをトピックとし、それを文章や口頭で表現することを通して日本語の勉強を進めていく。

発表は、日本語の能力に合わせて、さまざまな工夫が考えられる。例えば、OHPやビデオなどを使った発表、自分の専門分野についてや専門分野からの視点でとらえた日本人や日本の社会など。

② 合宿授業。

大学施設を利用して、日本人学生（日本語教育や留学などに興味がある者）とともに集中的に、これまで習った日本語を使うことに重点を置いた授業を行う。日本人学生の協力が得られれば、授業の計画や準備の段階から日本人学生にも参加してもらえると、普段の大学での授業とは違った効果が得られるのではないか。

③ 実際の使用を目指した授業。

普段の日本語の授業においても、たとえ初級であっても、文法や日本語そのものに注意を向けさせるだけではなく、むしろ何かを表現したり、理解したりすることを通して行う実際の行動までを意識した授業をめざしたい。授業で扱うトピックとして、うへの交流活動を利用することもできる。

『別科日本語教育』第9号

〈資料 2C〉

第2回 短期交流学生に関する打ち合わせ

・平成13年度後期の特別日本語クラスの授業

時間割

基本的に前期と同じ。(但し、前期に嘱託講師が担当した時間は未定。また、金曜日の杉山先生の授業は非開講。)【具体的な時間については別紙参照】

全体的な方針

日本語クラス外での様々なタイプのコミュニケーションの助けとなるような知識を、クラス活動を通して示す。

授業科目

「会話」：日本人学生との会話セッション。教室を出てキャンパス内にいる日本人から何らかの情報を得る。

「漢字」：日常生活で見かける漢字を中心に始めて。

「口頭発表」：報告会(実施予定に合わせて)に向けての準備として。

「基礎日本語」：二つぐらいのレベルに分け、そのレベル(の学生)に合わせて読解、聴解教材で日本語の練習。文法の再確認。

* (今後のコース内容の整備に向けて、例えば、「新聞・雑誌を読む」「ニュースを聞く」「手紙を書く」「日本人の会話を聞く」「旅行の計画を立てる」「訪問者と話す・電話で話す」「文法クイズ」などといった科目名はどうか。)

「個人指導」：基本的に希望者のみとし、内容も学生の要望を聞いて決める。あくまでも学生が主導で行なわれる。日本語能力試験のための練習もここで。

学部での授業「日本文化総合演習」(関口先生) 他

・前期(教師、学生)アンケート結果

【別紙参照】

・学期初めのオリエンテーション

全体への説明

コースの説明(内容、出席、評価)、学部授業とコースとの関係、時間割作成の期限

各学生へのインタビューとプレイスメント試験

学生のレベル(文法的知識、語彙、口頭によるコミュニケーション能力、読む力)、日本語学習についての目標・希望、これまでの日本語の勉強について、日本留学で期待すること、コース説明の確認

- ・交流学生以外の参加者

前期の徐さんのような学生に対する対応として、他の交流学生が全員休んでしまった場合の授業について。

- ・日本人学生ボランティアの募集

「会話」授業での交流学生と日本語で話してもらえる日本人学生の確保
(募集の情宣と時間の調整)

- ・交換留学生用ホームページの内容について

(大東のスタッフ、学生と過去、現在、未来の交換留学生との間の情報交流の場として)

時間割：

教授要項、特別コースの概要

授 業：

特別クラスの授業、各学部での授業

(プロジェクトの成果、授業風景、内容、授業例など)

学生生活：

交流学生用の行事 (パーティー、報告会など、その他の大学行事など)

留学生会館とその周辺

現在の交流学生から (長期休暇 (ホームステイや旅行など)、サークル活動などの日本人学生との交流について、日本語学習 (特別クラス、教室外、学部での講義など) など)

大東での留学生生活を終えて：

大東の先生、友達、スタッフなどへの一言

新しい交流学生へのアドバイス。

メール交換相手の紹介：

リンク集：

日本での生活に関する情報として (交通機関、電気・ガス、ゴミの分別など)

地域生活の情報 (東松山市、板橋区、東上線沿線、その他近隣市町村)

- ・生活アンケートの集計、分析と結果の今後の扱い方について

将来的には、結果の公開も視野に入れた見直しも。

〈資料 2D〉

短期交換留学生の教育について

1. 特別クラスの現状

これまでの交換留学生を見ていると、彼らの日本語(運用)能力は次の6つのレベルに大別できる。

- ① 日常での日本語による生活はもちろん、大学院などでの勉強にも、日本語で十分対応できる。
- ② 日常生活においては日本語で困ることはほとんどないが、学部や大学院での日本語による授業には多少問題が残る。
- ③ 日常生活でのコミュニケーションには問題ないが、学部での日本語による授業にはかなり難しい。ただ、一般留学生用の科目なら十分ついていける。
- ④ 日常生活では、何とかコミュニケーションは取れ、その点では問題ない。しかし、学部での一般留学生用の授業についていくには多少力不足。ただ、チャレンジとして授業に参加することもできる。
- ⑤ 日常のコミュニケーションにおいてある程度はこなせるものの、十分な能力はまだない。文法的語彙的知識も限られている。
- ⑥ 日常のコミュニケーションにおいて問題があり「日本語で話せる」というレベルの能力はない。

こうした幅のある学生に対し、特別クラスは学部での授業(一般留学生用授業も含む)が受けられない学生(基本的に初級(④~⑥))を対象とすることが前提となっている。

問題点として

【受け入れ側の問題として】

限られた授業数(と教員数)で上の全てのレベルに対してはもちろん、対象となる学生(④~⑥)にも十分な日本語のプログラムを組むことができない。

*こうした制約に対し、発想を転換し、限られた時間内で効果があげられるように、特別クラスでの日本語授業は学生の留学生活における日本語学習の一部とし、授業外での日本語によるコミュニケーション活動を援助するものとして位置付けようとしているが、十分に対応できていない。

【学生の側の問題として】

学生が、今回の留学生活を通じて、どのような能力や知識(例えば、文法知識、漢字、

日本社会に関する知識など)を伸ばしたいのか、また、それぞれにおいてどの程度のレベルにあるのかを事前に十分に(授業の準備ができる程度に)知ることができない。

また、当の学生自身もはっきりとした要望や自身のレベルの認識を持っているわけではない。

*したがって、学生のレベルや要求を探るのに一学期かかってしまい、実質半分の期間でしかそれらに答えられていない。

また、仮にそれがわかったとしても、教材を用意し授業の準備をするのための時間的余裕がない。

2. 教育方針について

【基本方針の必要性】

上で指摘した問題では、学生に合わせて、毎回特別クラスの内容を変えなければならない。学生に合わせてことを考えて行くと、プログラムに準備としても膨大な作業が発生してしまう。また、そうした多大な努力にもかかわらず、それがいつもうまく行くとは限らない。

したがって、交換留学生を積極的な姿勢で受け入れていくには、受け入れ側の彼らに対する基本的な教育方針(方向性)が必要。

【これまでの特別クラスでの基本的な方針】

- ① 特別クラス以外での日本語使用の機会を日本語学習の中心と考え、そこでの日本語学習をできるだけサポートできるような知識を中心に教える。
- ② また一方で、学生の興味や関心などを踏まえ、できるだけ様々な場面でいろいろなタイプの日本語を使う機会に触れられるようにする。

【今後について】

こうした中途半端な方針で今後進めていくには、現状では教員側への負担が大きくなり、十分な授業体制が取れないところまで来ている。その結果、学生の十分な満足も得られにくい状況に陥る可能性がある。

3. 短期交換留学生プログラムとして(提案)

交換留学生に対する教育を学部での授業や日本語教育も含めた全体的なプログラムとして考えていくことが、交換留学生にとってだけでなく大学全体としても発展的な方向ではないか。

そこで、プログラムの具体的な形を以下のように簡単に考えてみた。

『別科日本語教育』第9号

【基本的な教育方針（目標として）】

日本という異なる文化の中での留学生活において、単に日本語の上達や専門の勉強だけでなく、日本での実際の生活や経験を通して日本、日本人(学生)、あるいは日本文化や社会に対するその学生なりの捉え方や見方ができるようになる。または、その手がかりやきっかけを得る。

【基本的な構成要素】

- ① 一年間の計画を立てる
- ② 各学部での授業に積極的に参加する（たとえ、日本語の問題があっても）
- ③ 日本語教育を行う（必要であれば、上級者にも提供する）
- ④ 学内外の各行事に参加し、他の参加者との交流を深める
- ⑤ 一年間の留学生生活を振り返り、その報告を行なう。報告は、記録として残し一部または全てを公開とする。

【プログラム運営の体制として】

上のようなプログラムを運営する場合は、(各学部でそれぞれに行なうのではなく、)基本的な方針を踏まえて全体的な調整(コーディネート)を行なう立場の専属の教員が必要となる。

そのコーディネートの下で連絡を取り合いながら、上の各パートと関係する部署がそれぞれのパートを委嘱され担当する。

例えば、

- ①、⑤ は専属の教師が行ない、
- ② は各学部の先生方に授業への受け入れをお願いする。
- ③ は日本語学科、あるいは別科が担当し、
- ④ では国際交流センターが主催したり、またその他の主催者との連絡に当たる。

その他、専属の教員は、各パートの調整に当たる一方で、センターと協力して学生の学習上・生活上の相談に応じる。

〈資料 2E〉

短期交換留学生の教育における基本的な方針と方策について

I. 日本語特別クラスの現状と問題点：基本方針の必要性

交流協定による交換留学生は、本来各学部が受け入れを行ない、学部での日本語による授業を受けることになっている。しかし、交換留学生として来校する留学生の多くは、日本語で行なわれる学部での授業について行くだけの日本語能力がないのが現状。そうした日本語能力の低い学生に対応するために「日本語特別クラス」(以下、特別クラス)を国際交流センターで開設することになった。

ここで、問題となるのは、この特別クラスでどのようなことを目標に日本語教育を行っていけばよいかといった基本的な方向が不在ということである。例えば、学部の日本語による授業が分かるようになるためには、別科のように徹底したカリキュラムが必要である。しかし、それは、開講できるコマ数や一年間という滞在期間等を考慮すると、現実的ではない。では、その他にどんな目標設定がありうるだろうか。

少なくとも、ある一定の方向性の下に特別クラスの授業が行なわれなければ、特別クラスとして期待される成果やその存在の意味さえ失われてしまう。

II. 短期交換留学生の教育に関する方針と目標

これまでの交換留学生への対応の経験を踏まえると、交換留学生、特に特別クラスを受講する学生の日本語留学の共通した目的は、次の二つに集約できる。

- ①日本語の勉強。(日本語で日本人とコミュニケーションができるようになること。)
- ②日本について知る。(日本の文化や社会、歴史の他に日本人のものの考え方や人間関係のあり方など。)

しかし、これら二つのニーズに特別クラスの授業だけで応えたいこうとすることは、現状の開講可能コマ数および教員スタッフの面で現実的ではない。たとえ、形だけ授業名をそろえたとしても、それで十分な成果をあげるには、周到な準備が必要となり、十分にその準備を行なうことが現状では難しい。

そこで、特別クラスだけで、交換留学生の教育を担うのではなく、それ以外の諸活動も視野に入れて、交換学生の教育の全体を考える必要がある。諸活動というのは、学内外で行なわれる様々な交流活動である。つまり、授業、特に特別クラスの授業とそうした交流活動とを連携させ、それらの全体を交換留学生の教育プログラムとして、組織し直すのである。そのことによって特別クラスでの授業もプログラム全体の中に位置付け、その役割を明確化できる。

そのプログラムでは、①特別クラスなどの授業によって知識を与えることと、②交流活動を企画し、実際の体験を通じて授業等で得た知識を確認したり、新たに発見

したりできる環境を準備することの二つを大きな柱と考えることができる。上の学生のニーズに即して言う、授業などで得た日本語や日本に関する知識を持って、日本人社会と接する。より深い交流を持つためには、より踏み込んだコミュニケーションが必要になり、そのためには、さらに高い日本語能力や詳しい背景知識が必要となる。そして、そのような深い交流が行なわれることによって、日本や日本人についてこれまで知らなかったことや知識としてしか分からなかったことが理解できるようになる。そして、そのことが、また授業への積極的な参加を促がす。こうした循環を作ることができるのではないか。

また、こうしたプログラムの目標としては、ある一定レベルの日本語能力に達することや、ただ単に楽しかったといったことだけではなく、交換留学生在が留学前にもっていた日本や日本人、日本語などに対する見方や知識などが、日本における学生それぞれの学習と経験を通して、修正されたり、またはより確固たるものになったりして、その学生自身なりの見方や捉え方に到達できる。こうしたことを目標として考えることができるのではないか。

Ⅲ. プログラムの具体的方策として

1. 参加行事

交換学生の交流活動には様々あり、学生が自主的にそうした活動を探して参加する場合もある。そうした学生の主体性を奨励する一方で、プログラムとしてある程度の強制力を持つ行事を用意する。つまり、学生の自主的な活動を阻害しない程度に、必須の行事を設定することによって、活動の偏りを少しでもなくすと同時に、逆に様々な理由で積極的になれない学生についても最低の交流活動を保障する意味においても、以下の四つの行事を設ける。これらの行事は原則として課題を設けそこでの交流(コミュニケーション)を促がすようにする。

①. 学長との会見

本学留学中に2回(来日直後と帰国直前)の学長との会見の機会を持つ。課題として、特に帰国直前の会見では、一人一つ何か学長に対し質問し、学長からの回答を得るといったことも考えられる。

②. ホームステイ

留学中に必ず一回はホームステイを経験する。課題としては、ホームステイ後に、そのホストファミリーにお礼状を書く。また、できれば、そのホストファミリーからも、お礼状の返事をいただけるようお願いすることもできる。

③. 地域との交流

地域との交流は現在でも様々な形態が考えられる。現状では、地域の小中学校へ行って、自国について紹介するという活動が中心的なものになっている。これらは、相手の交流活動に協力するという形で行なっている。

④. 短期交換留学生による留学報告会

平成13年度より開催しているもので、一年間の留学で学生自身が考えたことを日本語で発表する。これは、学生に一年間の留学生生活を振り返る機会を与えると同時に、大勢の聴衆の前で日本語で発表を行なうことで、一年間の留学のまとめと考えることもできる。

それと同時に、これは学内における留学生及び留学に対する関心を高める機会の一つとしても位置付けることもできる。

2. 日本語特別クラス

基本的に日本語能力が低いと認められる学生に対し、開講されている。また、先に述べたように、この特別クラスだけで成果を出そうとするのではなく、上の四つの行事などとも連携しながら、授業以外での学生のコミュニケーションに役立つような授業内容を目指す。

①. 位置付けと目標

学生は「日本」という環境の中で日々接する様々なものの中から、自分なりの方法で、自分が関心をもっているものを吸収している。特別クラスも、その学習環境の中の一つとして、学生が学習できる機会を提供する。先に述べたように、特別クラスは学生の学習において、その全てを担おうとするものでなく、一つの学習の機会にすぎない。その意味で、学生の授業以外での日本語によるコミュニケーション及びそれに伴う日本語学習を側面から支援できるように授業を行なう。

特別クラスでは、学生の「日本語」に関する知識(文法・文型及び語彙)を積み重ね学習していくことを中心に構成する。しかし、これは「聞く」「話す」「読む」「書く」といった各技能そのものの養成を目指すと言うよりも、授業での諸活動(聞いたり、話したり、読んだり、書いたりすることなど)を通して、文法の知識を確認したり、理解できる語彙の範囲を広げたりすることにより、学生が授業以外での日本人や日本社会との接触において、コミュニケーションを行なう際の助けとなる知識を身につけることに重点を置く。

②. カリキュラム

特別クラスの置かれている現状を踏まえて、次の授業科目を開講する。

「基礎日本語」「漢字」「会話」「日本文化」

これらの科目は、その時の学生のレベルに合わせて複数にレベル分けしたり、あるいは開講しなかったりすることもあるが、基本的に条件が許せば開講することとしたい。

「基礎日本語」:特別クラスの中で中心的な授業で、日本語の、特に初級の文法とその使い方を学習する。それと同時に、日常生活に関連したり、学生が関心を持つトピックに関係する語彙を紹介する。

『別科日本語教育』第9号

「漢字」：特に非漢字圏の学生に対し、基本的な漢字を一通り紹介する。

「会話」：日本語による会話において、必要となる知識を学習する。

「日本文化」：日本の伝統的な文化や現代日本の生活について紹介する。現在、日本語学科の「日本文化総合演習」を特別クラスの一コマとして時間割に組み込ませていただいている。

3. 学部授業への参加

特別クラスでは、できるだけ低いレベルの学生を対象とし、学生の能力に合わせて授業を行なっているが、少しでも能力のある学生は、自身の日本語力を伸ばすための挑戦という意味においても、できるだけ学部授業(留学生用の日本語の授業を含めて)に参加するように勧めている。

〈資料 2F〉

日本語の学習と特別クラスについてI. 日本語学習について

・聞いてわかる

先ず最初は、話されている日本語を聞いてわかることが大切です。

日本で生活するためには、先ず自分のおかれている状況が理解できることが第一です。いま何が話題や問題になっているのか、どんなことが自分に要求されているのか、その要求に応えるとどうなるのか。そうした状況はほとんどが日本語で示されます。そこで使われる日本語は話す言葉だけではなく、書いた言葉もあります。書いた言葉はゆっくり読むこともできるし、その場で辞書を引くこともできます。しかし、話す言葉はそうすることができません。ですから、先ず聞いてわかることが大切です。

反対に、日本での生活は全ての場面が日本語の勉強のチャンスです。ですから、できるだけいつも日本語に注意して、そのチャンスを十分に利用してください。

・チャレンジする

日本語の上達のためには、知っている日本語をいろいろな場面で何度も使って練習することが重要です。一度覚えたことを忘れてたり、少しぐらいわからない言葉があったりしても、できるだけいろいろな場面で日本語を使ってみてください。失敗しても、次のチャンスはたくさんありますから、できるだけ多くの日本語を使うチャンスでチャレンジしてください。

・チャレンジするための知識

チャレンジするには勇気と知識が必要です。

日本語や日本人とのコミュニケーションについて知識を持っていると、チャレンジする勇気も湧いてきますし、もっと大きいチャレンジに挑戦することもできます。

日本語でコミュニケーションするために必要な知識は、

①日本語についての知識：

日本語の文法、語彙や文型の意味や使い方、発音の仕方などの知識です。

②日本人や日本の文化、社会について知識：

日本人とのコミュニケーションの仕方、例えば、何かを頼んだり、友達を誘ったりする時どうしたらいいか、相手に丁寧に話したい時どう言ったらいいか等です。

また、例えば、今の日本の若者や大学生の間ではどんなことが話題や問題になっているか等です。

・使いながら覚える

知識を増やすには、日本語を使いながら知識を覚えることが重要です。

チャレンジする前に十分な知識を覚えておくことは不可能です。何をどれだけ覚えたら十分かを定めることができないからです。ですから、少しの知識でも、失敗してもいいですから、あなたの知っている知識を使って日本語でコミュニケーション

ンしてみてください。日本語を使ってコミュニケーションしていると、知っていた知識がもっとよくわかるようになるでしょう。また、コミュニケーションの中で新しい知識を発見するかもしれません。そうしたら、その新しい知識をまた使ってみてください。

II. コースの授業と日本語学習

日本語特別クラスは、あなたの日本での日本語学習を助けるためのものです。

ですから、あなたが自分で日本語を勉強しようという気持ちを持ってください。あなたがあなたの日本語の勉強について、目標を決めて、そのための計画を立てて、実行してください。日本語の授業は、そのためのアドバイスやお手伝いをするだけです。

日本語特別クラスの日本語の授業では、あなたがいろいろな場面で日本語を使ってチャレンジするのに必要な知識の一部を教えます。授業では、いろいろな方法やいろいろな教材を使って教えますが、それを練習して覚えるのはあなたです。そして、それを使って日本語でコミュニケーションするのもあなたです。

日本語の授業の中で、あなたができることは3つあると思います。

- ① 日本語でコミュニケーションする時に必要な知識を勉強する。
- ② あなたの日本語の能力を自分でチェックする。
- ③ 先生や学生と日本語でのコミュニケーションにチャレンジする。

III. コースの目的と内容

日本語特別クラスの目的は、あなたの日本語でのコミュニケーションを助けるために、それに必要となる知識を教えることです。それと同時に、日本語の授業もあなたが日本語でコミュニケーションにチャレンジする場面の一つでもあります。

日本語の授業は、原則として全て日本語で行ないます。最初は難しいかもしれませんが、先生方もあなたを助けることができますし、日本語でのコミュニケーションをたくさん経験すれば、授業でも、授業以外でも、日本語でコミュニケーションすることに自信がついてくると思います。チャレンジしてください。

今学期の日本語特別クラスの中心的内容は次の四つです。

- ① 日本語を聞いてわかること。
- ② 発音や文字(ひらがな、かたかな、漢字など)についての知識を勉強すること。
- ③ 基礎的な文法や文型の提示とその整理。
- ④ 語彙や表現の意味や使い方についての知識を知ること。

〈資料 3A〉

学部推薦者の選抜に関して（案）

I. 各学科への推薦人数（受け入れ人数に合わせて調整するか。）

- ①これまで通り、各学部学科から提示された人数に合わせて、調整する。
 - ・学部では無条件に受け入れざるを得ない。
 - ・人数調整が難しい（特に、同じような条件の者が多い場合）。
 - ・別科としては確実に学生の進路を決定できる。しかし、これが学生に過信を生む可能性がある。
- ②別科での人数調整は、一定の「要件」を満たしているかどうかだけを見る。
 - ・学部の方で最終的な選抜についてのイニシアティブを持つができる。
 - ・別科での調整で最終決定をしなくてもいい。
 - ・推薦に漏れる学生が出てくる可能性もある。そうした学生の、次の進路の準備は間に合うか。
 - ・調整のための、「要件」の内容をどう考えるか。
 - A. 推薦の条件（出席率と成績）で機械的に決める。
 - B. 推薦の条件に加え、その他の要素も考慮に入れる。
 - ・考慮するその他の要素として、学習意欲、日本語力、真面目さ、努力、等

II. 別科での選抜時の判断材料として（規準となる材料）

- ①本人の希望
 - ・年2～3回の進路希望調査から
- ②成績（前期）と出席率
- ③統一試験結果
 - ・結果の信頼性を増すために複数回実施する。
 - ・その際は同一の問題で行なうか、同等レベルの問題、あるいはレベル差をつけた問題にするか等の、試験問題をどうするか。
 - ・複数回実施する際、各結果を同等の重さで評価するか、2度目の結果を重視するか、また最も高得点のものを採用するか等の、結果の扱い方をどうするか。
- ④日々の学習（努力、態度）
 - ・定期的実施する週間試験の結果から、普段の努力の見る。
 - ・各授業担当の先生方から、担当する学生の学習態度や意欲などを、例えばアンケート形式で評価してもらう。
- ⑤予備面接
 - ・例えば、希望者の多い学科の希望者を対象に、事前に別科（別科長同席）で面接をして、日本語力や意欲を確認する。

*こうした推薦者選抜（調整）の基準等を各学科に事前に連絡して、理解を得

ておく必要はあるのでは。

Ⅲ. 二段階選抜方式

これまでは、学科によって10月に面接を行ない推薦学生の受け入れを確認していたが、今後、実質的に最終的な選抜を各学科に委ねるとした場合、10月（授業開始約5カ月後）の段階で、最終的な選抜を終了させるのではなく、その後再度最終的な選抜を行なう二段階選抜方式が考えられる。

例えば、時期については流動的だが、

一次選抜（面接）（10月の初め～半ば）

- ・選抜（面接）の結果、仮許可あるいは、今後の日本語能力の伸びに応じて、受け入れ（合格）の可能性を、例えば5段階で表す。
- ・できれば、選抜の結果と共に、コメントも。
- ・学生は、その結果を見て希望学科の変更や推薦入学以外の進路の検討もできる。

二次選抜（面接）（11月末または、12月～1月頃）

- ・一次選抜の評価が低かった場合は、推薦以外の進路も同時に模索する必要がある。
- ・また、当該学科の提示した受け入れ可能人数に達した場合は、二次選抜が受験できるのは、一次選抜を受験した学生のみとした方がよいのでは。

*事務的な問題、つまり二次選抜の時期によっては一般留学生入試と、入学手続き等のための時期的なズレが生じる。

*現行の制度においても、国際関係学部と日本語学科では、形式的ではあるが実質的に二度選抜を行なっている。（事前面接と一般留学生試験の際に小論文を書かせている（国際）。事前面接び一般留学生試験の際の面接（日本語）。）

Ⅳ. 希望学科決定のための情報提供について

①各学科のパンフレット等からの情報

- ・前年度のものを別科事務室に揃えておいて、例えば4月や5月のガイダンスの際に学生に見せることできるのでは。
- ・また、これまでに入手できたものは、日本人学生向けのもので、全て日本語で書かれているので、特に日本語が不自由な学生がどれだけ必要な情報を得ることができるか。

②別科修了生等の先輩からの経験談を聞く機会

- ・既に、年に二回（5月と12月）別科修了生と接する機会を設けているが、毎回修了生の出席が少ない。
- ・その他にも、別科修了生や学部留学生と接触できる機会を作るあるいは参加を促がすこともできるのでは。

③各学科からの説明会

④学部授業の聴講

・時期や回数などとも関係するが、単に希望学科の決定のためだけというのではなく、むしろ、学部での実際の授業を体験することにより進路決定後の学習への動機付けとしても有効ではないか。

・また、学部学科の、別科あるいは別科生への理解の一助ともなるのでは。

⑤ オープンキャンパス

・本来は日本人学生向けだが、時期的理由から希望学科決定のためというより、学部入学後の、学生生活のための情報として、利用できるのでは。

*有効な措置を検討する上で、学生がどのような情報を元にして希望学科を決めているのか、調べてみる必要があるかもしれない。

V. 推薦漏れ学生の進路

別科での人数調整が、必ずしも各学科の受け入れ人数と一致しない場合は、推薦されても入学できないという場合が起こり得る。その際の、推薦漏れの学生の進路をどうするか。

① 推薦に漏れた学生に対し、どこまで援助するか、できるか。

- ・こうした学生に対しても、別科として（責任を持って？）積極的に援助していくべきか。
- ・一般留学生試験受験の場合、他大学や専門学校受験などの場合、何がどこまでできるのか。（例えば、情報収集、受験対策など）
- ・あるいは、本人に任せて、特にタッチしないか。

② 推薦漏れが決定する時期が、遅くなり過ぎないように。

- ・推薦以外の進路を検討しなければならない可能性がある場合、次の進路準備のために、推薦漏れの決定が遅くなりすぎないようなスケジュールが必要となる。

*いずれにしろ、推薦されても入学できないことがある場合には、

そのことと、そうなった場合に別科としてどこまでできるのかを、事前に本人及び保証人に周知徹底しておく必要がある。

VI. 大学院（研究生含む）志望者の扱い

現状では、別科は本来、学部進学希望者を対象としているため、大学院進学希望者については、そのための特別な支援体制がない。そのため、こちらから積極的に、学生に大学院志望かどうかを聞くこともしていないし、申し出があっても、必ずしも十分な支援ができるというわけではない。

① 今後こうした学生に対しても何らかの援助をしていく必要があるか。

- ・必要があるとすれば、どんなことができるか。（例えば、受験システム、情報収集、指導教員紹介）

『別科日本語教育』第9号

- ・事前に、入試要項やガイダンスなどで、学生に大学院（研究生）の進路もあり得ることを知らせておく必要があるか。あるとすれば、どんな形で、どの程度するか。
 - ・学部推薦と同様に、制度として今後整備していくか。
- ②有資格者には、別科として積極的に大学院志望を薦めるか。
- ・本来の別科のあり方が変わってきてしまうため、入学者の選抜やカリキュラム、授業内容にも見直しが必要になってくる。